

た！

びつくりした小山羊達は、寢床や、竈の中や、棚の後や、時計箱の中や、洗濯桶の下に隠れました。併し、狼は大きな口を開いて、長い赤い舌と、尖つた歯を現はして、眼を輝かしながら小山羊達の後に跳びかゝつて一匹くと食べてしまいました。併し、前方の時計箱に隠れた一番小さな小山羊だけは、食べられずに助かりました。狼は、歩き過ぎたのと食べ過ぎたのとで、身體がだるくなりました。そこで外に出て行つて、木の下で氣持よく眠り込んでしまいました。

間もなく外から歸つて来て、小屋の前に立つた母山羊の驚きはどんなでしたらう！ 小屋の戸は廣く開いてゐるし、中に入ると、部屋の中の道具はひっくりかへつてゐるし、シーツが寢床から引き剥がれてゐるし、新しい洗濯桶

は、ばらばらに碎けてゐるといふ有様です。そして、小山羊は一匹も姿を見せないのです。

「ナンニー！ ビリー！」と母山羊は周圍を見廻しながら、一々小山羊の名を呼んで、最後に、一番小さな小山羊の名を呼ぶと、時計箱の中から小さな聲がして、

「お母さん私は此所にゐますよ。狼は行つてしまいましたか。」といひました。

母山羊は時計箱の中から小山羊を引き出しました。そこで小山羊は、恐ろしかつた出来事を話しました。

母山羊はもう小屋にゐることも出来ないと思ひましたから、また肩掛をきて、小山羊の頸には赤い襟巻を巻いてやり、外に出て、小山の裾をうろついでゐました。太陽は輝き、鳥は歌つてゐましたけれども、憐れな母山羊の心



は悲しみで一杯でありました。

が、角を曲ると、親子の山羊の眼に入つたのは、木の下でぐつすり眠り込んでゐる狼の姿でありました！ 狼は、四邊の木の枝が顫へるばかりの大きな鼻をかいてゐましたが、その顔には、六匹の小山羊を食つたと思はれないやうな、無邪氣な微笑を浮べてゐました。

『怪物！』と叫んで、母山羊は狼に近づきました。どうして敵を取つてやうかと考へましたが、なほよく見ると、狼の腹は何か生物が入つてゐるやうに、むくくと動いてゐました。狼は生きたまゝ小山羊を呑み込んだため、小山羊は狼の腹の中はまだ生きてゐるやうです。

母山羊は大急ぎで小屋に戻つて、鋏と、針と、糸を持つて来て、静かに手際よく、狼の横腹を鋏で切り裂きました。すると、最初にナンニの頭がひ





よっこり現はれ、次にビリーの頭が現はれ、それから次ぎ／＼に小山羊が皆な
狼のお腹の中から飛び出しました。そして、六匹の小山羊はこれ程嬉しい
ことがないといった風に、母山羊を取り巻いて、踊つたり、跳ねたりしまし
た。お腹が大層すいてゐた狼は、小山羊を噛まずに、そのまゝ呑み込んでし
まつたのです。

「子供達、静かに！ 静かに！ 狼が眼を覺すと、いけません。」

母山羊はかういつて、小山羊達にいひつけて、小川から石を澤山持つて來
させ、それを狼の横腹に入れてから、その裂目を用心しながら縫ひました。
母山羊は静かに、そして上手に縫ひましたから、狼は少しも動かずに躰をか
きながら、眠りこけてゐました。それがすむと、母山羊と七匹の小山羊は、
一生懸命走つて小屋に歸りました。

間もなく、狼は眼を覺しましたが、胸が悶へ氣分が悪くてたまりませんでした。

「こんなに喉が渴くのは、棗と白墨を食ひ過ぎたためだナ。」と狼はいつて、背延びをして起き上り、水を飲みに小川へ這入つて行きました。併し、動き出すと、お腹の中の石がガチャ／＼と鳴りましたので、狼は大聲をあげました。

小さい山羊、小さい山羊

お前は私の骨を蹴る

ガチャ／＼鳴つて、私を打つ

山羊、お前は石塊か

狼は急いで小川の上にのしか、つて水を飲まうとしましたが、石が前の方



に押し出て來ましたから、狼は身體の平均を失つて、眞逆様に小川の中に落ち込んでしまひました。そして石が重かつたため、這ひ上ることが出來ないで、狼はその儘、小川の底に沈んで、二度と水の上に姿を現しませんでした。悪者の狼はかうして水に沈んでしまひましたので、もう、母山羊と七匹の小さな山羊の幸福を、妨げるものは一つもありませんでした。山羊達は何時までも小さな小屋の中で幸福に暮りました。

蛙の王子

願ひ事は何でも叶ふといふ、昔の仕合せな時代に、美しい六人のお姫様を持つた王様がありました。六人のお姫様の中でも一番おしまひのお姫様が一番美しく、眼は忘れな草のやうに緑で、頬は薔薇のやうに紅く、髪の毛は黄金の糸のやうでありました。そして空の太陽までが、お姫様の行く所へ随いて行つて、お姫様を照り輝かしてゐるかと思はれるばかりでした。さて、王様の御殿から近い所に、魔女や魔法使が棲んでゐる氣味の悪い暗

い森がありました。森の真中には一本の科の木があつて、その下に泉が湧き出てゐました。

或大そう熱い日のこと、その一番歳下の美しいお姫様は、御殿の花園で遊ぶのにも飽きて、森の中に走つて行つて、冷い樹蔭を歩き廻つてゐる内につか科の木の下の泉のところへ來ました。お姫様は此所で、腰を下して暫時休んでゐるうちに、黄金の毬を取り出して、空に投げては手に受けて、遊んでゐました。そして、毬を受ける度に嬉しさうに聲を立てました。このお姫様の一番好きな遊びはかうして毬を投げることでした。ところがその内にお姫様は毬を受け損ねたので、毬はころ／＼と轉つて行つて、泉の中に落ちてしまひました。

お姫様は駈けて行つて、泉の中を覗きましたが、毬は綺麗な水の中を下へ



下へと沈んで行つて、たうとう見えなくなつてしまひました。

『あゝ、私の毬！ 私の黄金の毬！ どうしたらよいでせう。どうしてあの毬を拾ひ上げることが出来るでせう。』

お姫様はかういつて泣きました。すると、足の下で嘎聲で、

『どうしました？ お姫様お泣きになるに及びません。あなたの涙は石でも溶しますよ。』といふ者があります。

お姫様は吃驚して、足の下を見ますと、一匹の蛙がその醜い平べつたい頭を水から出して、嫌らしい小さな眼を光らせておました。

『まア！ いやな蛙だこと。私は大事な黄金の毬を無くしたのだから泣かないではおられません。』とお姫様がいひますと、蛙は、

『お姫様、私が泉に潜つて毬を持つて來たら、あなたは私に何をくれます





か。』と訊ねました。

『お前それは眞實かい！ お前が眞實に、毬を拾つて来てくれたら、私はお前に何でも上げますよ。眞珠の頸飾でも、私の一番美しい上衣でも、私の小さな黄金の冠でも、お前に上げますよ。』

『私は上衣も冠も入りません。あなたが私を御殿に連れて行つて、遊び仲間にするのと約束してくれるなら、私は毬を取つて來ます。私はあなたの椅子に坐つて、貴方の黄金の皿から食べ、あなたの黄金の杯から飲み度いのです。そして、夜になると、あなたと一しよに温い小さな寢床で、絹の夜着の中で寝たいのです。この事を約束して下さい。』

『私は黄金の毬を取つて來てくれたなら、どんな事でも約束します。』

お姫様は、蛙が小さな娘のお友達になれる筈がないから、蛙が毬を拾つて

来て、泉の中へ歸つて行つて、自分と同じ蛙の仲間と遊ぶだらうと考へてかういつたのです。

そこで、蛙は綺麗な水の中に身を洗めて、下へくと潜つて行きました。そして二分間と経たない中に、毬を口に銜へて水の上に浮び上つて、毬を草の上どころがしました。

『あり難う！ あり難う！』とお姫様はいつて毬を取り上げると、一生懸命御殿の方へ駆け出しました。

『待つて下さい！ 待つて下さい。あなたは私を一しよに連れて行くと約束したぢやありませんか。私はそんなに早く走れないのです。』と蛙は嗔聲で叫びました。

併しお姫様は、知らぬ顔で、どん／＼早く走りました。そして御殿に歸つ

て来た時には、もう黄金の毬を拾つてくれた親切な蛙のことなどすっかり忘れてしまひました。

次の日、お姫様はお父さんの王様と一しよに黄金の皿で食事をしてゐますと、戸の外に變な聲が聞えました。それは、何かゞびヨん／＼と大理石の段を飛び上つて来るやうな音でした。すると、今度は戸を強く叩く音が聞えて『可愛い、お姫様、戸を開けて下さい！』といふ聲がしました。

お姫様は椅子から跳び下りて、誰か知らと怪しみながら、戸を開けに駆けに行きました。お姫様が戸を開けると、敷居の上に坐つてゐたのは、お腹を大きく脹らせて青い毬のやうに見える一匹の蛙でした。それは、もちろん、黄金の毬を拾つて来た蛙だつたのです。お姫様はびしやんと戸を閉めて、急いで戻つて来て、テーブルに着きましたが、その顔は赤くなつて、いかにも

不愉快さうに見えました。王様はそれと気がつくとも、

「お前を連れに巨男でも来たのかネ？」と訊ねました。

「イーエ、科の木の下に棲んでゐて、昨日私のために黄金の毬を拾つてくれた嫌らしい蛙なんです。」

「蛙が何の用で、此所へ来たのかネ？ 眞實のことをお話し。」

そこで、お姫様は泣きながら、蛙をお友達にすると約束した話を残らずに話しました。すると王様は嚴かに、

「王女といふ者は、どんな事があつても、約束を守らねばなりません。行つて、戸を開けて蛙を中に入れなさい。」と申されました。

すると、戸がまたどんと鳴つて、啞聲の歌が聞えて來ました。

戸を開け給へ、お姫様



私はここで、待つてます。

科の木蔭の泉の側で

昨日約束したその事を

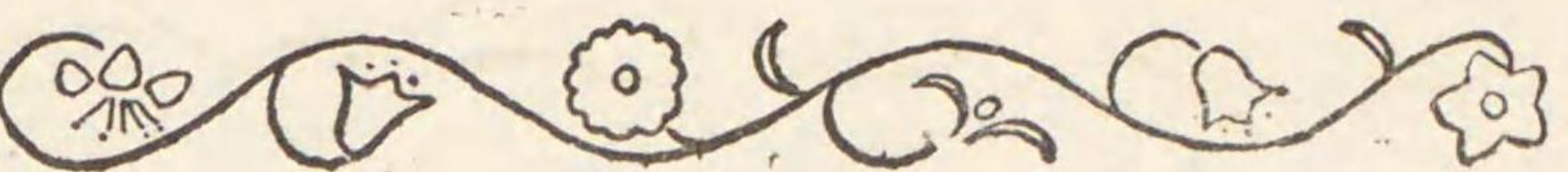
思ひ出して、こゝ開け給へ。

そこで、お姫様も仕方なく、戸を開けますと水で濡れた大きい肥えた蛙がびヨんと戸の中に飛び込みました。それから、お姫様の椅子の下まで跳ねて行つて、

「私を持ち上げなあなたの側へ坐らせて下さい。」と啞聲でいひました。

お姫様は、嫌でしたが、お父さまの眼がチラと此方に光つたので、仕方なく俯いて、蛙を取り上げて、自分の隣の椅子に乗せました。

「お姫様、私も一しよに食べられるやうに、もつと私の口の傍へ、皿を押し



て下さい。それから杯も、もつと近くへ寄せて下さい。』

蛙はかういつて、ナブキンでその濡れた指を拭きました。

お姫様は同じ皿で、一蛙としよに食事をするのが嫌でたまりませんでした。そして自分の杯の葡萄酒を啜つてゐる蛙の様子を見ると、胸が悪くなりましたが、お父さまのいひつけには背く譯に行きませんでした。併し蛙は、まだまだひどいことを云ひ出したのです。生菜を残して他の物は何でも食べてしまつた蛙は、

『私は疲れましたから、お姫様、あなたの寢床へ連れて行つて下さい。私はあなたと一しよにあなたの小さな絹の夜着で寝みませう。』といつたのです。

『イーエ、寢床に入れることは出来ません！ 私はお前に觸るのも嫌です。』といつてお姫様は、啜り泣きをはじめました。併し、お父さんの王様は、



直ぐに蛙を取り上げて、寢床に連れて行くやうにいひつけました。

そこで、お姫様は二本の指で蛙を摘み上げて、腕を延ばして、段を駆け下りて自分の小さな部屋に入りました。

『醜い蛙、お前は此所で結構だ！』

お姫様はかういつて、部屋の隅に蛙を投げました。

併し、お姫様が寢床に上つて絹の夜具の中に入ると、蛙は直ぐに部屋の隅から出て来て、寢床の傍のビロードの足置臺に上つて来て、

『お姫様、お姫様、私は疲れて寒いのです。どうか私もあなたの温い小さな寢床の中で眠らせて下さい。』といひました。

お姫様は起き上つて蛙をつかまへて、頭の上に高く差し上げて壁に向つて打ちつけようと思いました。併しお姫様は、自分は王の娘だから、誰にでも親

切にしなければならぬと思ひ返しました。お姫様の青い眼からは怒憤の色が消えて行きました。お姫様は、自分の小さな白い床の中に、冷い濡れた蛙を入れることは、どう思つても我慢の出来ないことでしたが、絹の夜着の隅にそつと蛙を置きました。

ところが、蛙が寢床に觸るや否や、不思議な事が起つたのです！

これは夢ではないかと思つたお姫様は、眼を擦つて見なほしました。併し大きな醜い蛙がなくなつて、その代りに立派な若い王子が、親切さうな美しい眼で、此方を見てゐたのです。

『美しいお姫様、あり難うございます！ たうとう、私はあなたのお蔭で自由になりました。』

王子はかういつてから、悪い魔女のために魔術をかけられ、蛙に姿を變え

られた事、王女の友達となつて、王女と一しよに飲み食ひし、王女の寢床に寝むまでは、魔術が解かれない筈だつた事などを話しました。

お姫様は蛙を殺さなかつたことを喜びました。といふのはその後お姫様とその王子とは、大變仲のよいお友達となつたからです。

『私は自分の國に歸らねばなりません。併し、貴方が私と婚禮をするおつもりなら、私と一しよにお出で下さい。』と王子が申しました。

ところが、お姫様のお父さんの王様も、その王子が氣に入つて、直ぐにお姫様と王子を結婚させました。その結婚式はすばらしい盛んなものでありました。婚禮の次の日、八頭の雪のやうに、白い馬に曳かれた黄金の馬車が、御殿の門の中に曳き入れられました。これは花婿の王子と、花嫁の王女を、王子の國に運ぶための馬車でした。八頭の白馬は、何れも頭に駝鳥の羽を飾

つてゐてその馬銜は純金で出来てゐました。そして、その手綱は赤い色の皮でした。馬車の後の席には、忠義な家來が一人附いてゐましたが、この家來は、主人の王子が蛙に變つた時、悲しみのために胸が張り裂けるやうな思ひをしたのでした。花婿花嫁が群衆に禮をすると、馬車は進み出して、馬に着けた鈴が鳴り響きましたが、間もなく後の方でひどい物音がしました。王子と王女は吃驚しました。馬車の後の方の部分が毀れたのだらうと思つて、後を振り向いて、忠義な家來にその譯を訊ねました。すると、家來は微笑みながら、

「お驚きになられましたか。殿下が蛙におなりになりました時、私は胸が張り裂けると思ひましたから、鐵の帶で胸を締め上げたのです。只今の物音はもう用のなくなつたその鐵の帶の音でございます。」と申しました。

三人は晴々した氣持で、馬車を駆けさせました。科の木の下の方の泉の傍を通りかゝた時、吹き上つてゐる泉の中から聲が聞えて來ました。

王子の心は

この水のやうに深く

この水のやうに清いのです

王女は

科の木が青い影を投げるこの泉で

嘗つた約束を、悔ひないでせう。

ラプンツェル

一人の男と、おかみさんが、小さな家に住んでおりました。その家の窓は、隣りの大きな畠の方に向つておりました。この畠は性質の悪い、歳とつた魔女のものでしたから、今まで誰一人として、この畠に入つた者がありませんでした。併し、おかみさんは何時もこの畠の方を見ておりました。といふのは魔女の畠は、大變高い塀で取り圍まれておりましたが此方の家の窓の方が、その塀よりも高かつたからです。一人も小供が無かつたおかみさんは、毎日寂し

さうに、窓から隣りの畠を眺めておりました。

或日、おかみさんが何時もの通り隣りの畠を眺めておると、生々とした玉菜の出来てゐる苗床が眼に入りました。と、不意におかみさんは、何よりもあの玉菜が欲しいと思ひ出した。併し、もちろん、玉菜を手にとれることは出来ません。しかし、おかみさんの玉菜を手に入れたいといふ願ひは、一日ごとと嵩じて行つて、おしまひには顔色が青くなり、身體が痩せて行つて食事もしなくなりました。

さて、おかみさんの夫は、妻が苦しうな氣息を吐いてゐるのを見ると、可哀想になつて、若しこのまゝにして置いたら、妻は死ぬだらうと考へました。

そこで夫は、日が暮れると高い塀を乗り越えて行つて、手早く玉菜を抜き

取つて、妻のところへ持つて歸りました。おかみさんは直ぐに玉菜を食べましたが、それが旨しかつたので、もつと玉菜を欲しいと思つて、夫にせがんで、明日の晩も玉菜を取りに行く約束をして貰ひました。併し今度は、魔法の方で張番をしてゐて、夫が入つて來ると、

「お前は大胆にも私の玉菜を盗むのか。」と叫びました。と男は恐ろしさに顫へながら、

「小母様、どうかお赦し下さい。實は、私の妻が死ぬばかりに貴方の島の玉菜を食べたがるものですから、仕方なく、貴方の島を荒しに來たのです。」といひました。

この答は魔法の心を柔げて、一ツの事を約束すれば、その罪を赦してやると、申しました。

「お前の妻は何時も小供がないといつて、溜息を吐いてゐるが、仙女の力でお前の妻が小供を生んだら、直ぐに私はその兒を貰ふよ。」

魔法はかういつて、持つてゐる杖を振りました。

すると間もなく、夫婦の間に小さな小供が生まれました。すると歳とつた魔法女は、間もなくやつて來て、約束だからといつて、その小供を持つて行つてしまひました。

やがて、その小供は生長して、美しい娘になりました。魔法はその娘の名をラプンツェル(魔法の言葉で玉菜といふ意味です)とつけました。魔法はこの娘を大變可愛がりました。そして、誰か來て、可愛い、娘を奪つて行きはしないかと、心配してゐました。そこで魔法女は、頂上に小さな窓が一つしか開いてゐないで、他には入口も上り段もない高い塔を造つて、ラプンツェル

ルを、こつそり閉ぢ込めました。

併し魔女はラプンツエルがどうしてゐるか心配して、毎晩塔へやつて来ました。塔には入口がありませんから、塔の下に立つと、かういふのです。

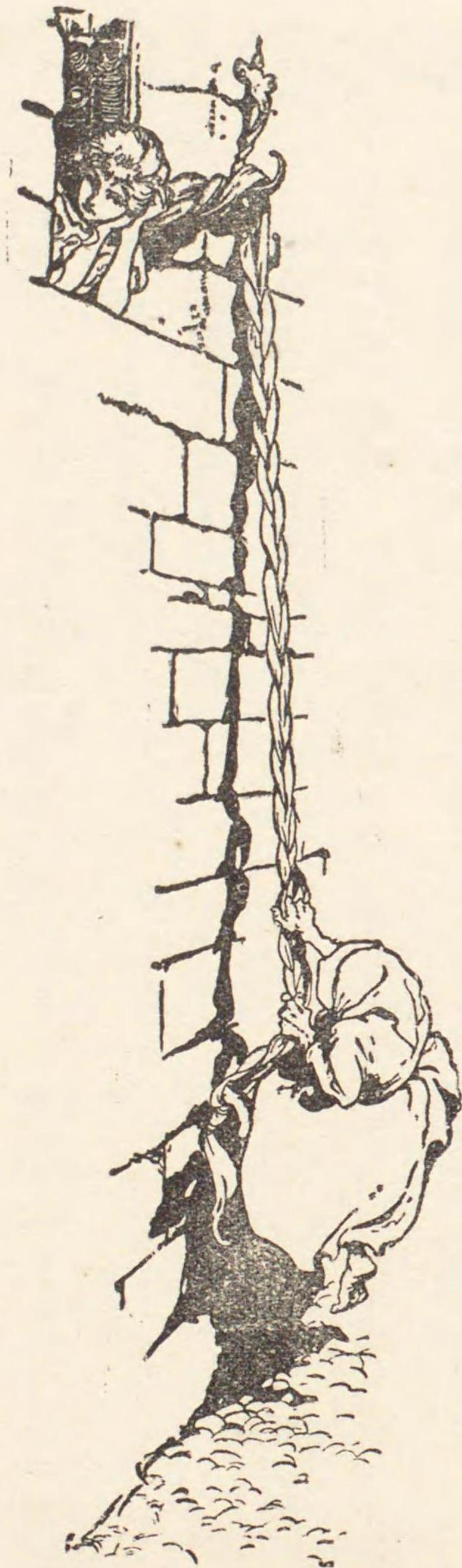
ラプンツエル ラプンツエル

梯子がなくて上れない

お前の髪を垂しておくれ。

するとラプンツエルは、絹糸のやうに美しい長く組んだ髪の毛を下におろします。と、魔女は、その髪の毛に捉つて、小さい窓から塔の中へ入つて行くのでした。

さて或日、一人の王子が森の中を通ると、奇妙な塔を見ました。王子は立ち止つて見上げました。塔の中からは、歌の聲が聞えて参りました。この歌





は、實に美しくて歸つてからもその歌の聲が絶えず王子の胸に響いてゐました。で、王子はその次の日も、その塔に行つて見ました。と、今度は、歳とつた魔女が、ぴょんくと跳ねて来て塔の小さな窓の下に立つと、

ラブンツエル ラブンツエル

梯子がなくて上れない

お前の髪を垂しておくれ

と叫んでゐました。

すると、塔の上から二本の長く組んだ黄金色の髪が下つて来ました。魔女はそれに取り附いて、小さい窓から塔の中に入つて行きました。

『私も、あつして塔の中に入つてやらう。』

王子は、かう獨言をいひました。

ラブンツエル

次の日になると、王子は朝早くから森の中に来て、塔の下に立ちました。そして、

ラプンツェル ラプンツェル

梯子がなくて上れない

お前の髪を垂しておくれ

と申しました。

二本の美しい髪が垂れ下つて来ると、王子は両方の手でそれを捉へて、窓に上つて行きました。

ラプンツェルは見知らぬ人が窓から上つて来たのを見て吃驚して、後に跳び退きました。ラプンツェルは今まで人といへば、魔女より外には見たことがなかつたので、王子を見てひどく驚いたのです。併し、王子は親切で優し



くありましたから、ラプンツェルは直ぐに安心いたしました。

それから王子は毎日、ラプンツェルを訪ねて参りました。そして二人は塔から逃げ出す方法を考へました。王子が絹を持つて来ますと、ラプンツェルはそれで長い繩を拵へました。二人はその繩を窓から吊り下して、塔から逃げ出す事に決めました。

魔女は秘密の塔へ来る道を知つてゐる者があらうとは、夢にも思ひませんでした。或日、ラプンツェルは魔女を塔の中に引き上げてから、

『貴方が、あの毎日私の所へ来るあの王子より、もずつと重いのは不思議です。』といひましたので、旨くたくんだ計略が、すつかり駄目になつてしまひました。

『なに、王子！ この悪い阿魔。お前は王子をこの塔の中に入れてのかい！』

魔女は身を顛はしてかういひました。そして、その節の立つた手をラプンツェルの美しい金髪に巻きつけると、鋏で、髪をぶつつり切つてしまひました。

それから魔女は、森の真中にラプンツェルを連れて行つて、そこへその儘捨てました。ラプンツェルは、たつた一人で、森の中を彼方此方とさまよひ歩きました。

その夜、王子は何時ものやうに、塔の下に来て

ラプンツェル

梯子がないから上れない

お前の髪を垂しておくれ

といひました。

と、魔女が、切つて置いた二本の髪を吊り下したので、王子はそれに取りすがつて、小さな窓から塔に入つて行きました。併し、そこには美しいラプンツェルがゐるに、魔女が齒をむき出して、唸りながら立つてゐました。

『可愛い鳥は飛んでしまつたよ。今度は、この猫がお前の眼を潰すのだよ。』
魔女がかういつたので、王子は夢中になつて、窓から外へ身を投げました。併し、幸ひ茨の叢の中へ落ちたので、生命は助かりましたが、茨の刺にさゝれて両眼が潰れてしまひました。そこで、盲人になつた王子は、ラプンツェルのゐなくなつたのを悲しみながら、手探りで、森の中をさまよひ歩きました。

王子は森の奥へくと歩いて行きました。と、美しい歌の聲が、漂ふやうに聞えて參りました。その聲の來る方へ歩いて行きますと、悲しい歌を唄つて

あるラプンツエルが参りました。

ラプンツエルは王子を見ると、駆け出して来て、兩腕で王子を抱いて、嬉し泣きに泣きました。その大きな涙の二粒が王子の眼に入つた時、王子の眼が治つて、元の通り、よく見えるやうになりました。

二人は手に手を取つて、森を出ました。それから王子の御殿へ行つて、そこで婚禮の式を挙げました。そして二人は長い間、幸福に暮しました。



雪姫と七人の矮人

寒い冬の日のことでありました。雪は大きな鳥の羽が舞ひ下りるやうに、ひらりと降つておりました。お后は御殿の中で、開いた窓の側に坐つて、お裁縫をしておりました。この窓の枠は、黒檀で出来ておりましたから、白い雪は一層白く見えました。お后は、針を動かしておりました。しかし、仕事に身を入れておませんでしたから、ふと針が滑つて、指を突きました。と、その傷から、血が三滴ほど珠数玉のやうに、白い雪の上に落ちました。



『綺麗なこと!』

お后は白い雪が赤く染つたのを見て、

『雪のやうに白い、血のやうに赤い、黒檀のやうに黒い小さな娘が欲しい。』
と、何気なく云ひました。

と、間もなく、この願ひが叶つて、お后は大層美しい女の子をお生みになりました。この女の子の肌は、雪のやうに白く、その唇は血のやうに赤く、その髪の毛は黒檀のやうに黒くありました。お后はこの娘の名を雪姫とつけました。

併し、雪姫がまだ赤ん坊の頃に、母のお后は死にました。間もなく父の王は、一人の王女と結婚なさいました。この新しいお后は、大層美しい人でありましたが、高慢で、嫉妬心が深く、自分よりも美しい人がこの世にゐると



いふことが、何よりも氣になるのです。このお后は、いろいろの魔術を行ふことも知つてゐました。そして、このお后の一番大切な物は、魔法の鏡でした。この鏡は、世界で一番美しい人の名を告げることが出来ましたから、お后は毎日絹のカーテンを引いて、氣味の悪い淵のやうな鏡の中を覗き込みながら、

鏡 鏡 壁の鏡

世界で一番美しいのは私か

いひます。すると鏡が

お后さま この世界には

貴方のお顔より美しい顔がありません

と答へるのです。

雪姫と七人の矮人

さて、お后はだんくと美しくなつて行く雪姫には氣が付きませんでした
が、或日何時ものやうに鏡に向つて、

鏡 鏡 壁の鏡

世界で一番美しいは私か

と申しますと、鏡は何時もと違つて、

お后のお顔は美しい

併し、雪姫はお后よりも美しい

と答へました。これを聞くお后はカツと腹を立て、

『どうかして、あの子を無くしてしまはなければならぬ。』と考へました。そ
こで、一人の宮廷附の獵夫を呼んで、譯を話して、雪姫を森の中へ連れて行
かせて、再び戻つて來ないやうにといひつけました。



お后が獵夫にかういつたのは雪姫を殺すやうにといふ意味でありました。

併し獵夫は心の優しい人でしたから、美しい雪姫が泣いて、生命を助けてく

れと願ふのを見ると、とても自分の手で殺す氣になれないので、

『森の中へ入つて、二度と、御殿へ歸らないやうにしないさい。』といひまし

た。獵夫は雪姫が森の中へ行つたら、直ぐに獸物に食はれるだらうと考へて

御殿に歸つて來て、雪姫はもう死んだと、お后に申しました。

併し、雪姫は何の害も受けずに、森の中を通つて行きました。雪姫は温和

しくて、顔が大層美しいものですから、荒い獸物も雪姫を噛まうとはしませ

ん。小鳥は雪姫が通る道々に、楽しさうな歌をうたひました。雪姫は森を奥

へくと進んで行きましたが夕方になつてから、小山の傍の小さな小屋に行

き着きました。雪姫は大層疲れた上に足を傷けましたので、その小屋の戸を

開けて、中へ入つて行きました。

この小屋といふのは雪姫が今まで見たこともない人形の家といつてもよい位の極く小さな、さつぱりした小屋でありました。部屋の中には、小さなテーブルが立つておりました。その周囲には七ツの小さな椅子が置いてあります。そしてテーブルの上には、七ツのナイフと七ツのフォークと七ツのスプーンと七ツの皿と、七ツのコップがちやんと置かれておりました。そして、部屋の隅には、白い床被をかけた、小さな七ツの寢床が置かれておりました。

小屋の中には人が一人もいませんでした。雪姫は安心して、どれが一番身に合ふかと思つて、順々に椅子に腰を下して見ました。それから雪姫はお腹が減つていたので、テーブルの周囲を廻りながら、お腹が一杯になるまで小さなパンを食べたり、葡萄酒を飲んだりしました。次には白い寢床を一つ





一つ試験して、一番柔かいのを選んで、それへ身體を乗せると、ちびこまつて眠り込んでしまひました。

間もなく、小屋の持主である七人の矮人が、その日の仕事をしまつてこの小さな小屋に歸つて來ました。矮人達は一日中、山で黄金を掘つて疲れてゐましたから、直ぐにテーブルに着いて食事をはじめようと思ひました。併し、ランプに火をつけて部屋が明るくなると、部屋に誰が入つて來たことが分りました。

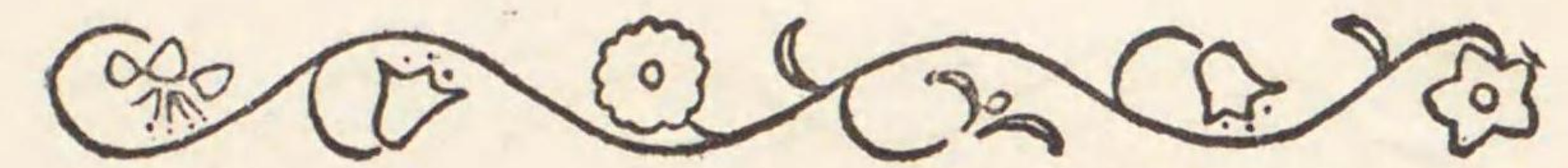
「誰が私の椅子に坐つたのだ？」と一人の矮人が叫びました。

「私の皿の物を食つたのは誰だ？」と二番目の矮人が叫びました。

「誰だ？ 私のパンを食つたのは？」と三番目の矮人が叫びました。

「私の葡萄酒を飲んだのは誰だ？」と四番目の矮人が叫びました。

「誰だ？ 私のスプーンを使つたのは？」と五番目の矮人がいひました。
 「私のナイフも使はれた！」と六番目の矮人が叫びました。
 「私のフォーフも使はれた！」と七番目の矮人がいひました。
 矮人達は四邊をぐる／＼見廻はしましたが、寢床の方を見ると驚いて大きな聲で叫びながら、雪姫の眠つてゐる床の周圍に集つて参りました。
 「何といふ美しい子供だらう！」と一人の矮人が叫びました。
 「まるで、天使のやうだ！」と二番目の矮人が叫びました。
 「皮膚が雪のやうだ！」と三番目の矮人がいひました。
 「あの赤い唇と頬を御覽！」と四番目の矮人がいひました。
 「髪の毛は黒檀のやうに黒い！」と五番目の矮人が叫びました。
 それから、一同は一しよに、



「世界中探したつて、こんな美しい子はない。」といひました。
 矮人達は、そつと夜着をかけて雪姫を起さないやうに、静かに自分達の床に行きました。七番目の矮人は寢床がなくなりましたから、一時間づゝ順番に他の矮人と一しよに眠りましたから窮屈で困りました。けれども、自分の床には、美しい子供が寝んでゐると思つて、喜んでゐました。
 朝になつて、雪姫は眼を覺しました。雪姫は自分の周圍に立つてゐる七人の奇妙な矮人を見て、吃驚しました。併し、矮人達は皆な親切な顔をしてゐますし、優しさうに話しかけるので、すつかり安心して、森の中に来た譯を残らず話しました。
 「ア、！ それは悪いお后がやつたことだから、あなたは二度とお后の所へ歸つていつてはいけません。」と一番歳とつた矮人がいひました。

「あなたは、いつ迄も此所にゐてはどうです？ 此所にをつて、私たちのために料理をしたり、小屋をお掃除したりしてくれませんか。」と一同がいひました。

「私も、この小屋に置いていたゞければ嬉しい。」と雪姫もいつて、直ぐに立つて、朝飯の用意に取りかかりました。

矮人達は黄金を掘りに出て行く前に、雪姫に向つて、自分達の留守の間、決して外に出てはいけぬ。また、誰が来ても、すぐ小屋の中に入つてしまふやうにといひました。

「屹度あの悪いお后があなたを探しに來ますよ。」と矮人達はいひました。

雪姫はいはれた通り、いひつけを守りますと約束して、嬉しうに小屋のお掃除をはじめました。夕方になると、矮人達が歸つて來ました。そして、



雪姫を取り巻いて、面白うに遊びました。或者は雪姫の毛糸を兩方の手にかけて雪姫がそれを巻くのを手傳たりしました。或者は、畫本を見せました。繪の上手な一番小さな矮人は、繪具を持つて來て、雪姫の姿を描きました。

さて、お話變つて、遠くの御殿では、お后が雪姫はもう死んだと獵夫からの報知を受けましたので、安心して、魔法の鏡の前に行つて、カーテンを引くと、自分の美しい姿が鏡に映つたので、喜んで微笑みました。

鏡 鏡 壁の鏡

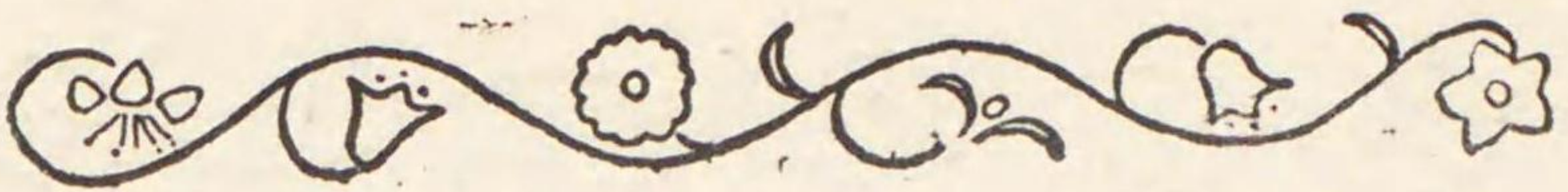
世界で一番美しいのは私か

併し、正直な鏡は、

お后さま あなたの笑顔は美しい

雪姫と七人の矮人





併し、山の前方の矮人の家に

あなたよりも美しい顔がある

雪姫は矮人の家で仕合せに暮してゐる

と答へました。

「私は騙されたのだ！ 雪姫はまだ生きてゐるのだ。併し、雪姫が何所に隠れてゐても、私は見つけだして殺してやる。」とお后は叫びました。

そこで、お后は自分の顔を茶色に染め、歳とつた行商人の老婆に身を變へて、リボンや、レースをバスケットに入れて、雪姫を探し出すために、御殿を出ました。

お后は魔術を知つてゐましたから、木や、草や、花の言葉が分りました。お后が道を行くと、草や木が「私共は雪姫を見た」と囁きました。



「雪姫は、この道を通つて行きました。私共はあの小さな跣足の足で踏まれたのです。」と草がいひました。

「雪姫はこの道を行きました。私共は雪姫の前掛をひつかけました。」と叢がいひました。

「雪姫の行つた道は此所です。私共は一番美しい蕾を雪姫に上げました。」と花達が申しました。

かういふ譯で、お后は間もなく、七人の矮人の棲んでゐる小屋の中を覗くと、雪姫は爐の前に坐つて、矮人の靴下を直してゐました。

お后は老人らしく腰を低く曲げながら、窓を叩いて、「可愛いお方、出ていらつしやい。リボンとレースを買つて下さい。」といひました。雪姫は飛び上つて窓のところへ来て、

「イーエ、私は矮人が留守の間は外に出られないのです。けれど、あなたの持つてゐる品物は見たいのです——。」といひました。

「では中に入れて下さい。」

「入つても差支へありませんよ。」

雪姫は戸を開いて、老婆を中に入れてやつて、

「私は新しい青いレースが欲しいのです。」といひました。

「こゝによいのがありますよ。どれ、私が結んで上げますから。」

かう老婆はいつて、手早く、雪姫の頸にレースを巻きつけて、氣息が止るまで、強く締めつけました。雪姫は死んだやうになつて倒れました。

「ヒイ、ヒイ」と老婆は笑ひました。「魔法の鏡は違つた答へをするだらう。」

といつて、倒れてゐる雪姫をそのまゝにして、急いで行つてしまひました。



夕方になつて矮人達が歸つて見ると、雪姫が冷くなつて倒れてゐるので、

すつかり驚いてしまひました。併し、矮人達は頸に巻かれてゐたレースを解

いて、氣息を吹き入れました。すると、雪姫は息を吹き返へして、その頬が

また赤くなりました。そこで矮人達はその譯を訊ねますと、雪姫は歳とつた

行商人の老婆が来て、頸を締められた話をしました。

「その行商人のお婆さんは、悪いお后だつたのです。あなたが、其奴を中

へ入れたからいけないのです。もうこれからは、きつと私共のいひつけに背

かないと約束して下さい。」といひました。

さて、お后は御殿に歸ると、顔につけた色を洗つてしまひ、今度は、魔法

の鏡が、自分を一番美しいといふだらうと思つて、鏡の前に立ちました。併

し鏡は前と同じ答へをしたので、お后はがっかりすると同時に、ひどく腹を

立てました。

「雪姫がまだ死なないとしたら、私はまた出かけよう。」

お后はかういつて、自分の小さな魔法の部屋に入つて行つて、綺麗な龜の甲で拵へた櫛を取り出して、バスケットの中に納ひ込みました。この櫛といふのは、それで髪を梳くと、忽ち死ぬといふ恐ろしい毒の入つてゐる櫛でありました。お后は此時もすつかり、別な老婆の姿に姿を變へて行きましたから、矮人の小屋に着いた時に、雪姫はそれとは少しも氣がつかまませんでした。「中に入つて、櫛を見せて上げませうか。」と老婆が窓を叩いてかういひました。

併し雪姫は、矮人にいひつけられたことを思ひ出して、悲しさうに、「中に入つて貰ふことが出来ません。貴方のバスケットの中の物を見たいの

ですが。」と申しました。

「お嬢さん、中に入つても、どうもしませんよ。この櫛の美しいこと。一寸中に入れてくれると、あなたのその美しい黒い髪をこの櫛で梳いて上げるのに。そして、無代で、この櫛を上げるのに。」と老婆がいひました。

そこで、雪姫が戸を開くと、老婆はぴよんと中に飛び込んで、雪姫の長い黒髪を梳きはじめました。と、二三分もたぬ内に、毒が廻つて雪姫は死んだやうになつて床の上に倒れました。お后は雪姫の髪に櫛を着けて置いたまゝ急いで小屋を出ました。

矮人達が歸つて来て、驚いて髪の中から櫛を抜いて、いろ／＼手を盡しましたが、雪姫はなかく／＼氣息を吹き返しませんでした。併し、漸くにして、雪姫は眼を開いて、生き返つて来ました。

あなたは、何故また私共のいひつけに背いたのです？ 私共はお后があなたを見つげ出すといふことを、よく知つてゐたのです。」と矮人達が申しました。

雪姫はもう決して、誰も小屋の中に入れないと、約束しました。そして今度こそは屹度その約束を守らうと、決心しました。

さて、お后の方では、魔法の鏡で、まだ雪姫が生きてゐることが分ると、今度は決して失敗しない工夫を運らしました。お后は魔法の部屋に入ると、念を入れて、毒の入つた、見ると食べたくて堪らなくなるやうな美しい林檎を拵へました。お后は、半分は白くて毒の入つてゐない、そして半分は薔薇色で毒の入つてゐる一ツの林檎を拵へたのです。その毒のある方の側を一噛みでも噛むと、直ぐに死んでしまふやうな恐ろしい毒林檎でありました。

この林檎が出来上ると、お后は百姓女に姿を變へて、また、七人の矮人の小屋に向つて出かけました。

百姓女が矮人の小屋の戸を叩くと、中にをつた雪姫は、誰も戸の中には入れられないから、直ぐに行つてくれるやうにと、申しました。すると、百姓女になつたお后は、

「併し、私は林檎を賣る極く正直な百姓女です。御覽なさい、この林檎を。これを一ツあなたに上げます。そして半分は、私が食べます。」といつて、林檎を取り上げて、それを二ツに割ると、その半分を自分で食べました。

雪姫は百姓女が林檎を噛んでゐるのを窓越しに見て、食べたくて堪らなくなりました。そこで戸を開けて、半分の林檎を受け取ると、直ぐにそれを食べました。が、一口食べると雪姫は眞青になつて、床に倒れて動かなくな

つてしまひました。

「ヒイヒイ！」と笑つて百姓女は、窓を覗き込みながら、

「矮人達も今度はお前を生きかへらす事は出来まい。」といつて、急いで御殿に歸つて、鏡に話しかけました。

お后さま、

貴方のやうな美しい方は

何所にもありません

鏡がかういつたので、お后は有頂天になつて喜びました。

矮人が夜になつて歸つて來ますと、雪姫は床に倒れて死んでゐました。矮人達は百方手を盡しましたが、雪姫は動きもしなければ、眼も開きませんでした。

した。

七人の矮人は、愛してゐた雪姫の死骸を取り圍んで、七日の間泣いてゐました。そして、いよくお葬式をしなければならぬことになりましたが、雪のやうな肌をした、唇の赤い、黒檀のやうな髪の毛の雪姫を、冷たい黒い土に埋めるのは我慢が出来ないと考へて、矮人達は硝子の棺を拵へて、それに雪姫を入れて、棺の上に金文字で「王の娘の雪姫」と書きました。

かうして矮人達は、小山の傍にこの硝子の棺を運びました。そして矮人の一人が毎日、夜も晝も棺の傍で見張りをしてゐました。鳥達も來て雪姫の死んだのを悲しみました。始めに來たのは梟で、次に來たのは鴉で、その次に來たのは白鳩でした。

さて、或日、一人の若い王子が獵に出て、道に迷つて、七人の矮人の棲んでゐる小屋に参りました。そして、小山の傍で、小さな忠義な矮人に守られてゐる硝子の棺を見ました。王子は近づいて見て、硝子の中に、眠つてゐるやうに臥つてゐる雪姫を見て、吃驚しました。王子は今まで、雪姫のやうに綺麗な人を見たことがなかつたのです。そこで王子は、自分の寶物を皆な出すから、雪姫を賣つてくれと申しました。併し矮人達は、首を振つて、世界中の黄金を皆な貰つても雪姫はやれないと答へました。

『では、賣ることが出来ないなら私に雪姫をくれませんか。私は生命にかけても雪姫を可愛く思ひます。私はもう、雪姫がゐなかつたら、生きてゐられません。』と王子が申しました。

矮人達は雪姫を賣るといふ事は、嫌なことだと思ひましたから、王子に無

代であげるといひました。矮人達は、王子を可哀想だと思つたのでありませす。

王子の家來達は、硝子の棺を擔いで運んで行きました。その途中、家來の一人が石に躓きました。と、棺がひどく揺れました。その途端、雪姫の喉に詰つてゐた毒林檎の片が、ひよいと喉から飛び出しました。と、雪姫は、起き上つて、棺の蓋を上げて、不思議さうに、

『此所は何所ですか?』といひました。

『あなたは私と一しよにゐるのです。』と王子はいつて、今までのことを残らず話してから、

『私は何よりもあなたを愛します。あなたは私と一しよに私の御殿に来て、私と結婚して下さい。』といひました。

雪姫もまた王子を愛しました。で、王子のいふ通りにすると答へました。王子と雪姫は一しよに御殿に行きました。そして直ぐに、結婚の招待状を四方に出して、婚禮の用意をいたしました。

さて、悪いお后も招かれたお客の一人でした。お后は一番立派な着物を着て婚禮の式に出ることにしました。お后は、数多いお客の中で、自分の半分程も、美しい女はゐないだらうと思ひました。併し、お后が出かける前に、魔法の鏡の前に立つて、カーテンを引いていひました。

鏡 鏡 壁の鏡

世界で一番美しいのは私か

すると、驚いたことには鏡が、

あなたは美しく光つてる



けれども、今日の花嫁は

あなたよりも美しい

といひました。

お后は怒つて、結婚式には出まいと思ひましたが、花嫁はどんなに美しいか、それを見たいと思つて、たうとう出かけることに決めました。お后が御殿に着いて見ると、王子と並んで立つてゐる花嫁は、以前よりずっと美しくなつた雪姫でありました！

お后は怒つて、喉が詰るばかりでありましたが、御殿に歸ると、嫉妬と憤怒のために病氣になつて床に着くと、間もなく死んでしまひました。

雪姫はますます美しくなりまして、王子と二人で御殿に住んでゐました。併し雪姫は親切な矮人達を忘れずに、小さな七ツの椅子と寢床を造つて、矮





グリム童話
 人達が御殿に訪ねて来ると、喜んで迎へました。



音楽師

人間といふ者は自分勝手に、恩を忘れやすいものです！ 一匹の驢馬が長い間、真面目に働きましたが、もう歳をとつて重い荷物も曳けなくなりました。すると、その主人は、驢馬を殺して皮にしようとして考へ出しました。併し、歳とつた驢馬は、安閑と殺されるのを待つてゐる譯にも行かないので、或朝早くブレーメンに向つて出發しました。驢馬は町の樂隊の仲間に入らうと決心したのです。ところが出だすと間もなく、道の傍に坐つて苦しさを

に氣息を吐いてゐる一匹の歳とつた犬に出會ひました。犬は遠い道を走つて來たらしく、ハツハツと氣息をはずませてゐました。

『どうして、君はそんなに苦しさうな氣息使ひをしてゐるのかネ?』と驢馬が訊ねますと、犬は、

『私はもう歳とつて、獵に行くことも出来なければ、何の役にも立たなくなつたから、主人は私を殺さうと決心したのです。そこで、私は捉へられぬ前に、逃げ出して來たのですが、さて、どうして生活を立てたらよいかと、心配してゐるのです。』と犬が申しました。

『私と一しよにいらつしやい。私はブレーメンへ行つて、樂隊の仲間に入らうと思つて、今出かけて行くところです。私が笛を吹くから、君は太鼓を打ちませんか。』と驢馬がいひました。

『有り難う、では一しよに連れて行つて下さい。』と犬がいひました。そこで驢馬と犬は、元氣で出かけました。

暫時歩くと、三日も雨に逢つたといふやうな、悲しさうな顔をした猫が、道の側で横になつてゐるのに出逢ひました。

『トミーかい! どうしてさう怒つた顔をしてゐるのだい?』と驢馬が猫に訊ねますと、

『どうして愉快さうな顔が出来るかね? 私は歳とつて、齒も抜けたので、鼠を捕るよりも、火の側に坐つてゐたいのです。そこで、私の家のおかみさんが、私を河に投げ込まうと考へたのです。で私は、逃げ出して來たのですが、さて、これから先き、どうするか工夫がつかないのです。』と猫は悲しさうな顔でいひました。



「私共と一しよにお出で。私共は今から行つて樂隊の仲間入りをしようとするところだ。君は、夜の歌では有名だから、樂隊には持つて來いだ。」と驢馬がいひました。

「それは結構です。」と猫が叫びました。そこで、驢馬と、犬と、猫が、面白さうに出かけました。

やがて三人は、農家の庭の前を通りかゝりました。すると、門の上で、一羽の雄鶏が、ひどく高い聲を張り上げて鳴いてゐるので、三人の旅人は吃驚しました。

「どうして君はそんなに鳴いてゐるのかネ。君の高い聲には魂消たよ。」と驢馬が雄鶏に訊ねました。

「私は出来るだけ高聲で叫んでゐるのです。私は家のおかみさんに年中、時



刻を告げたのですが、恩知らずのおかみさんは、私の頸をひねつて、私を料理して、今夜のお客の御馳走に出さうとしてゐるのです。そこで私は聲を限りに鳴いてゐるのです。」と雄鶏がいひました。

「君、何も料理されるのを待つてゐる必要がないよ。私等と一しよに來て、樂隊の仲間入りをし給へ。君のそのよい聲は、樂隊には詔向さだ。」と驢馬が申しました。

雄鶏が下に飛び下りると、一同は樂しさうに出かけました。

併し一同は、夜になつても町に着くことが出来なかつたので、朝まで森の中で寝むことにいたしました。驢馬と犬は木の下に横になりましたが、猫と雄鶏は木の枝の中に寝む方が安心だと考へました。そして、猫は、そんな高い所へは登りませんでした。一番高い木の枝に飛び上つた雄鶏は、眼を閉

ちる前に、周囲を見廻しますと、

「ヤー、燈火が見える！ 餘り遠くない所に家があるに違ひない。家があると、何か食物があるかも知れない。兎も角も、この森よりは家の方が温かくて、氣持がよいだらうよ。」と叫びました。

そこで一同は出かけましたが、直ぐに赤屋根の一軒の家に行き着きました。開いた窓から、燈火が輝いてゐました。

一番背の高い驢馬は、前足を窓の端にかけて、家の中を覗きました。

「何がゐますね？」と犬と、猫と、雄鶏が囁きました。

「テーブルの上に御馳走が並んでゐるが、その周囲に盜賊が坐つて食べたり飲んだりしてゐる。」と驢馬が、低い聲で答へました。

「持つて來いの場所だ！」と一同が同時に、併し、小さな聲でいひますと、

驢馬が、

「さうだ。あのテーブルを占領すると、よいなア。」と答へました。

そこで、一同はどうしたら家の中へ入れるかと、いろいろ相談しましたが、たうとう、一ツの計略を考へつきました。

最初、驢馬の上に犬が上りました。そして、犬の背中に猫が這ひ上りました。そして、猫の頭の上に、雄鶏が飛び上りました。その時、恰度月が登りました。すると驢馬は、合圖をして後足で立ち上ると、犬が吠え、猫が啼き雄鶏は叫び、驢馬が吠えました。それから一同は窓から、盜賊が食事をしてゐる部屋へ飛び込みました。

戸の外の不思議な物音にいゝ加減驚いてゐた盜賊共は、不意に不思議な動物が窓から飛び込んで來たので、腰も抜かさなばかりに驚いて、家から飛び

出して、暗い森の中へ逃げ込みました。盗賊共は、鬼に襲はれたのだと思つたのです。

四人の音楽師は、テーブルに着くと、一週間も、何も食べなかつたといふ風に、がつくと食事をしました。食事が済むと、旅の疲労が出たので、燈火を消して、一同は思ひ々の場所へ行つて寝ました。

驢馬は庭へ行つて藁の上で眠りました。犬は戸の端の隅に横になつて身體を曲げました。猫は温い爐の側にうづくまり、雄鶏は一番高い垂木に飛び上りました。

併し燈火が消えて、四邊が静かになると、盗賊達は、チト吃驚し過ぎたといひ、

「行つて見て、實際、鬼だかどうか、見届けようではないか。」といひました。

そこで盗賊の一人が、家に戻つて来て家中を探しましたが、別に變つたこともありません。蠟燭に火をつけようとしたが、二ツの光つた猫の丸い眼を見て、それを爐の中の石炭の火と思ひ違へ、マッチを猫の眼に差しつけました。と、猫は怒つて、鋭い爪で、その盗賊の顔を引ツ掻きました。盗賊は驚いて、逃げ出さうとして、戸の所に來ると、そこに寝てゐた犬が跳び上つて、盗賊の足に噛みつきました。盗賊は急いで駆け出すと、庭にゐた驢馬に後足で力まかせに蹴飛ばされました。と、雄鶏は眼を覺して、一聲高く「コケッココー」と鳴きました。

盗賊は恐ろしさに顛へながら、仲間の所へ歸つて行つて、
「あの家には、歳とつた魔女がゐて、私に飛びついて、私は危く眼を掻き取られてしまふところだつた。戸の後には、短刀を持った男がゐて、私の足を

突いた。それから、庭には恐ろしい怪物がゐて、私を殴り倒した。それから垂木の上に坐つてゐた裁判官が、「悪者を連れて来い」と叫んだのだ。」と傳へました。

盗賊共は、その後、家に歸つて來ることができませんでした。四人の音楽師は、新しく見つけたその家に住んでゐて、決してその家を出て行かうと思ひませんでした。人の話では音楽師達は今でも、まだ、その家に住んでゐるといふことです。



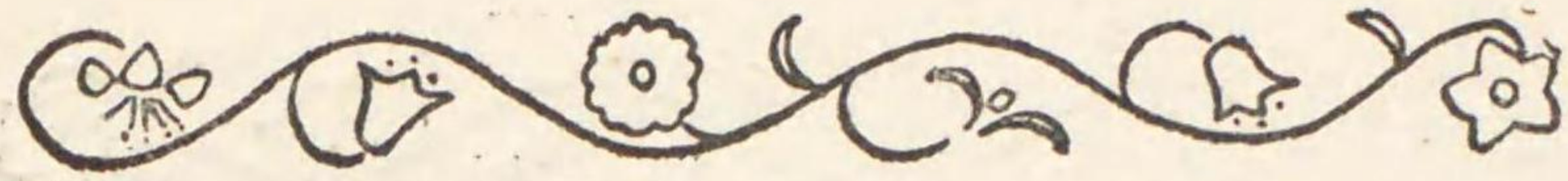
黄金鳥

大昔、一人の王様がゐました。この王様の御殿は、世にも稀な美しい花園の中に立つてゐました。花園にはありとあらゆる花が咲いてゐましたし、旨しい果物の出来る数々の木も立ち並んでゐました。花園の中で一番價値があり、一番珍しい木は、黄金の林檎の木でありました。王様はこの黄金の林檎の木を、大層大切に、林檎が木になると、毎朝毎晩、その數を勘定させて、林檎が盗まれはしなかつたかと、調べました。



ところが、或朝、植木屋が、林檎の数を勘定して見ると、一ツだけ無くなつてゐたのです！ 王様も、朝廷の人々も、大層驚きました。相談の結果、盗賊を見つげるために、一人の番人を置くことになりました。すると王様の一番上の王子が、最初に番をしたいといひ出しました。そこで王子は、番をしましたが、一時間か二時間経つと、寝込んでしまひました。そして、朝になつて王子が眼を覺しました時には、何時もの通り林檎が一ツ足らなくなつてゐました。

そこで、二番目の王子が、次の夜に番をしましたが、直ぐにまた眠つてしまひました。そして、眠つてゐる間に、三ツ目の林檎が盗まれたのです。さて、一番若い三番目の王子はすなほな、親切な若者でありましたが、人からは間拔けた子供だと思はれてゐました。この王子が、三番目の夜に、自



分が番をしたいといひ出しました。王様は笑つて、

『お前の二人の兄がやり損つたのに、お前が旨くやれると思ふか。』といひました。

併し王子は、自分が番をしたいといひ張つて、聴かないので、王様も、たうとう、末の王子に番をさせることを許しました。

王子は、夜中眠らないことに決心して、番をしてゐました。十二時の時計が鳴ると、一羽の美しい黄金色の鳥が飛び下りて来て、林檎を一ツ銜へて飛び去らうとしました。そこで王子は、弓に矢をつがへて、鳥をねらつて矢を放ちました。併し矢は鳥の尾の一本の羽を打つただけでした。鳥が飛ぶと、黄金色の羽が地に落ちました。次の朝、王子はその羽を持つて、父の王様の所へ行つて、昨夜見たことを話しました。

王様は貴族達を呼び集めて、その鳥の羽を見せましたが、貴族達は、この羽がこの國にある全ての寶物を一しよにしても、なほ叶はない程、價值のある物だといひました。

『一本の羽がそれ程の價值があるなら、その鳥を是非手に入れなければならぬ。』と王様が申されました。

そこで一番上の王子が、早速黄金の鳥を探しに出かけました。この王子は直ぐに黄金の鳥を見つけて、父の所へ持つて來られると、考へたのです。

やがて王子は、森にさしかゝりました。と、そこに一匹の狐が日向ぼつこをしてゐました。王子は、狐を射たうと思つて、弓と矢をつがへると、狐は聲を出して、

『王子様、私を射つてはいけません。私はあなたによい事を教へて上げます。

あなたは黄金の鳥をお探しになつてゐるのでせうが、今晚あなたは小さな村に行き着きます。その村には、二軒の宿が向ひ合つてゐますが、一軒の宿屋は大變面白さうに見えますが、あなたはその宿屋に入つて行つてはいけません。併し、別な一軒の宿屋はみすばらしく見えますが、あなたはその宿屋へお泊りなさい。』といひました。

『貴様のやうな馬鹿な獸物が、俺にいゝ智慧を授けるなんて生意氣だ。』

王子は嘲つて、弓を引き絞つて、狐に向つて矢を放ちました。併し狐は、素早く身をかはして、逃げましたから、矢は當りませんでした。

王子が尙も進んで行くと、夜になつて、小さな村に入りました。狐のいつた通り、二軒の宿屋がありました。そして、一軒の宿屋には、燈火があかくと輝いてをり、音樂の響きが窓から聞えて來ましたが、もう一軒の宿屋は暗

くて、陰氣でした。

『あのみすばらしい宿屋に俺が泊るなんて馬鹿な話だ！』

かういつて王子は、明るい宿屋へ入つて行きました。そして、飲んだり、食べたり、踊つたりして、お父さんのことも、黄金の鳥のことも、忘れてしまひました。

さて、幾日も過ぎましたが、一番上の王子が歸つて来ないので、二番目の王子が、黄金の鳥を探しに旅立ちました。この二番目の王子も、森の端で日向ぼつこをしてゐる狐に出逢ひました。狐は一番目の王子にいつたと同じ忠告を、二番目の王子にもしました。しかし此王子も、たゞ笑つただけでした。そして、狐に逃げないと、矢で射つぞといひました。

二番目の王子が小さな村に来ると、一番目の王子が燈火の輝いてゐる宿屋

の窓から、自分を呼びましたので、直ぐにその宿屋へ上つて行きました。そして、二番目の王子も家のことも黄金の鳥のことも忘れてしまひました。

三番目の王子は、二人の兄が、何時迄経つても歸つて来ないので、今度は自分が黄金の鳥を探しに出かけたいと、父の王様に願ひました。王様は、『お前が行つたつて何の役にも立つものか。』といひました。けれども、たうとう、王子の願ひを許しましたので、王子は直ぐ出立いたしました。

王子は森の端で、例の狐に逢ひました。狐は兄の王子達にしたと同じ忠告を王子にしてから、自分を射たないやうにと頼みました。

併し王子は、狐を射たうとしない許りか、優しい眼で眺めながら、『私はお前を射たないよ。』といひました。すると狐は、

『あり難うございます。王子様、私の尾の上にお乗りなさい。私は風のやう

に早く、あなたを運んで上げます。』といつて、その尾を真直ぐにしたので、王子はその上に坐りました。と、王子を尾の上に乗せた狐は、小山を越え、谷を越えて、飛んで行きましたが、その早さは風が狐の毛に觸ると、ヒューヒューと鳴る程でした。

夜になつて村に着くと、狐は薄暗い小さな宿屋の前で止りました。王子はその晩その宿屋に泊りました。そして次の朝早く、また出發しますと、間もなく先の狐がまた現はれて、

『この次にあなたのしなげなければならないことを教へて上げませう。こゝから真直ぐに行くと、兵卒が番をしてゐる大きなお城があります。兵卒は皆な眠つてゐますから、あなたは安心してお城の方にお進みなさい。そして、お城に入つたら、部屋々々を皆な通り抜けてお出でなさい。すると、黄金の鳥の

入つた木で作つた粗末な籠のかゝつてゐる部屋に行き着きますから、さうしたら出来るだけ急いで、黄金の鳥をお捉へなさい。併し、どんなことがあつても、その側に置いてある黄金の籠に鳥を入れてはなりませんよ。若しさうすると、あなたは後で後悔します。』といつて、尾を真直ぐにしました。王子はまた狐の尾の上に坐りますと、狐は小山を越え、谷を越えて飛んで行きました。その早さは、風が狐の毛に觸ると、ヒューヒューと鳴る程でありました。

狐は直ぐに黄金の鳥のゐる大きなお城に參りました。王子は眠つてゐる兵卒の間を大膽に歩いて、澤山の部屋を通り抜けて、黄金の鳥の入つた木製の籠がかゝつてゐる部屋に參りました。籠の側には、三つの黄金の林檎がありました。これはもちろん、王子のお父さんの花園から盗まれた林檎でした。

黄金の鳥は、美しく金色に輝いてゐました。王子は、木製の粗末な籠にこのやうな美しい鳥を入れて置くのは、いけないと思ひました。そこで狐の忠告にもかゝはらず、側に置いてあつた立派な黄金の籠に、黄金の鳥を入れ更へました。

ところが、鳥が黄金の籠に移ると、高聲で鳴き出したので、番人や兵卒が眼を覺して、王子のゐる部屋に駆け込んで來ました。そして、王子を捉へて牢屋へ投げ込みました。

その次の日、王子はお城の王様の前に曳き出されました。

王子は止むなく、黄金の鳥を盗みに來たことを白状しますと、直ぐに死刑をいひ渡されてしまひました。併し、王様は、

「お前が死刑から逃れる方法がたつた一つある。若しお前が、黄金の馬を連

れて來たら、私はお前を赦すばかりでなく、褒美として黄金の鳥をやらう。」と申しました。

そこで王子は、今度は黄金の馬を探しに出かけますと、お城の外で、例の狐に出逢ひました。狐は嚴かに、

「あなたは私のいつた通りにしなかつたから、ひどい目に逢つたのです。あなたはもう、私の助けを受ける資格がありません。併し、お氣の毒ですからもう一度助けて上げます。この道を真直ぐに行くと、立派な御殿に着きます。その御殿の厩に、黄金の馬が繋がれてゐるのです。この厩を番してゐる馬丁共は、眠り込んでゐますから、あなたはその馬丁共の眼を覺さないやうに、氣をつけなければなりません。そして、どんな事があつても、その馬には古い皮の鞍を置いて、側に懸つてゐる立派な黄金の鞍を置いてはなりません。」

と申しました。そして、その尾を真直ぐにしましたので、王子はまた、その上に坐りました。狐は小山を越え、谷を越えて、飛んで行きましたが、その早さは風が狐の毛に觸ると、ヒューヒューと鳴る程でありました。程なく、狐は大きな御殿に着きましたので、王子は直ぐに厩へ行く途を見つけました。馬丁達は眠つておりましたから、王子は用心して厩に入りました。そこには黄金の馬がゐりました。王子は古い皮の鞍を取り上げました。しかし、側にある黄金の鞍を見ると、古い鞍を馬に乗せる氣になれませんでした。『この鞍は粗末な古い鞍だ。こんな古い鞍を黄金の馬に置くのはよくない事だ。』

王子はかう獨言をいつて、黄金の鞍を取り上げました。併し、鞍が馬に觸ると、馬は大聲で嘶きましたので、眠つてゐた馬丁達は眼を覺して、王子を捉へて、王様の前に曳いて行きました。すると王様は、『お前は直ぐに死刑だ。併し、黄金の御殿に住んでゐる美しい王女を私の所へ連れて來たなら、生命は助けてやる。尙褒美として、黄金の馬をお前にやる。』といひました。

王子は生命を拾つたと喜んで、また黄金の御殿を探しに出かけました。間もなく、王子の來るのを待つてゐる例の狐に出逢ひました。狐は、『なせ、あなたは、私のいふ通りにしないのです？ あなたが私のいふ通りにすれば、もうとつくに、黄金の馬と黄金の鳥を手に入れてゐたのです。けれども私は、もう一度あなたを助けて上げませう。この道を真直ぐに行くと黄金の御殿に行き着きます。あなたは其所で、王女が湯浴をする夕方の時刻

まで待つてゐるのです。そして、王女が出す來たら、接吻をなさい。すると王女は、あなたと一しよに、逃げるといひ出すに違ひありませんが、その時に王女は父母に別れの言葉をいひたいといひますが、あなたは、それを許してはいけません。あなたは大急ぎで、王女を連れ出さなければなりません。』と申しました。

それから狐は尾の上にまた王子を乗せて、小山を越え谷を越えて、飛んで行きましたが、その早さは風が狐の毛に觸ると、ヒューヒューと鳴る程でありました。

黄金の御殿に着くと、王子は其所に隠れて、王女が湯浴に來るのを待つてゐました。夕方になつて王女が出て來ると、王子はいきなり飛びかゝつて、王女の頬に接吻しました。すると王女は、王子をぢつと眺めて、どうか連れ

て行つて下さい、何所へでも行くから、と申しました。併し王女は、

『父様と母様に左様ならをいさせて下さい。』と申しました。

『それはいけません。あなたは今から直ぐに、私と一しよに出かけなければなりません。』

王子がかういひますと、王女は泣き出しました。王子は泣き出した王女の美しい姿を見ると、可哀想になつて、その願ひを許してしまひました。

ところが、王女がお母さんのお部屋に入ると、忽ち御殿中の者が眼を覺しました。王子は捕へられて、牢屋に連れて行かれてしまひました。

次の日、王様は王子に死刑をいひ渡しました。

『併しお前が、たゞ一ツの事をしてくれ、ば、死ななくともよい。お前の見る通り、この御殿の前に大きな山があつて、眺望を妨げてゐるから、若しお

前が、八日の間にあの山を取り除けてくれたら、私はお前を赦す許りでなく、王女との結婚も許してあげよう。」と申されました。

その山は、大層大きい山でありましたが、王子はたゞ小さな鍬だけしか持つてゐませんでした。王子はその鍬で七日の間、掘り続けましたが、七日間の仕事は山の麓をほんの少しばかり無くしたばかりでありました。たうとう、王子はがっかりして坐り込んでしまひました。と、何だか温い、柔かな物が足に觸りました。見ると、それは例の狐でありました。王子は耻かしくて頭を下げました。狐は、

「私はまだ一度あなたを助けてあげます。あなたは、寝てゐらつしやい。私はあなたの仕事を仕上げますから。」と申しました。

朝になつて、王子が眼を覺した時には、大きな山がすつかり無くなつてゐ

て、御殿の窓から美しい景色が見えるやうになつてゐました。

王子は王様の前に出て褒美をいたゞきたいと願ひますと、王様も約束した事ですから、いや／＼王女を與へました。

二人が出かけますと、程なく、狐が現はれて、

「旨く行きました。併しあなたはまだ、黄金の馬と黄金の鳥を手に入れなければなりません。馬も鳥も、美しいそこにある王女様の物なのですから。」と申しました。

「併しどうしたら、馬と鳥を手に入れられるだらうネ。」

「私を信用して、私のいふ通り、間違ひなくおやりなさい。すると、屹度、馬も鳥もお手に入ります。」

狐はかういつてから、

『黄金の馬のゐる御殿へ行つて、王様にその美しい王女様を差し上げると、申すのです。すると、王様の家來達は、黄金の馬を連れて來ます。あなたは、馬に乗つて、そこにゐる人々に一々左様ならをいふのです。そして一番おしまひに、王女の手を握つて、馬の鞍に乗せてしまつて、馬を走らせるのです。黄金の馬は風のやうに早く駆けまゐりますから、誰も追ひつけません。』といひました。

王子は狐のいふ通りに王様の御殿に行き、王女を黄金の馬に乗せて、駆け出しました。そして、人々が止めようとした時には、馬が遙か遠方まで走つてゐたのでありません。

『旨くやりました。』と此方で待つてゐた狐が、王子を見るといひました。

『だが、まだあなたは黄金の鳥を手に入れなければなりません。王女様を私

に預けて置いて、あなたは一人で黄金の馬に乗つて、黄金の鳥のゐる御殿へお出かけなさい。御殿の人々は黄金の馬を見ると、大喜びをして、直ぐに黄金の鳥を持ち出します。すると、あなたは、その鳥籠を手取るが早いかな、人々があつといふ間に、逃げ出すのです。』

今度も、王子は狐のいふ通りにして、主尾よく黄金の鳥を手に入れて歸りました。狐は王女と一しよに、王子を待つてゐました。

『狐さん、あなたは私を助けてくれたが、私は一體、何をあなたにお禮をすればよいのでせうか。』と狐が向うに行きかけると、王子が訊ねました。すると狐が、

『私はあなたに一ツの願ひがあるのです。最初あなたにお逢ひしたあの森で、私を矢で射殺して、私の首と前足を、切り落して下さい。』といひました。

「それは、不思議なお禮だ！ 私はそんな事は出来ません。」と王子が申しました。

「では仕方がありません。お別れをせう。併しお別れする前に二ツのことを御注意させよう。絞め殺される人のためにお金を拂つてはなりません。また井戸の傍に坐つてはなりません。」と狐が悲しうにいひますと、王子が「お前は、ほんとに可笑しい動物だ！ 私が何で絞め殺される人のためにお金を出すものかね。また私は用もないのに、井戸の傍へは坐りはしない。」と申しました。

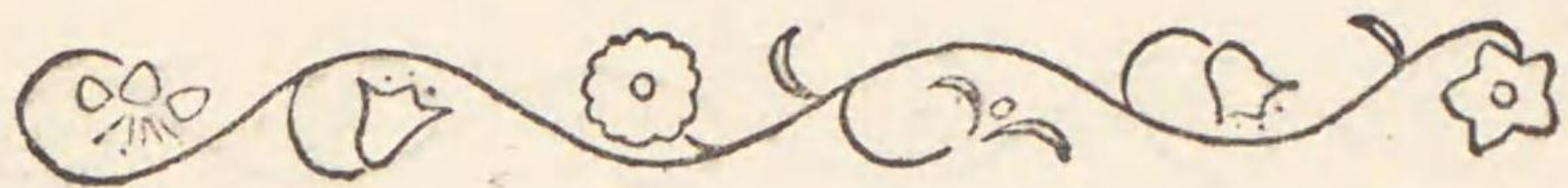
併し狐は、返事をしないで、左様ならといつて、森の中へ姿を隠しました。そこで王子は、鞍の後に王女を坐らせて、手首に黄金の鳥を止まらせて、馬を飛ばせました。

間もなく、二軒の宿屋のある小さな村に参りました。子供はいふに及ばず鷺鳥まで駆け出して来て、黄金の馬に乗つた王子の姿を眺めました。併し王子が、村の端まが来ると、人が一杯集つてゐました。訊ねて見ると、二人の男が首を絞められるところだ、と答へました。

王子はその二人の男を見ると、それは紛れもなく自分の二人の兄でありました。——愉快さうな宿屋に入つた二人の兄は、怠けてばかりゐて、悪い事をするので、とうとう今や死刑にされる場所なのでありました。

「私は金を拂つて兄を救ひませう。」と親切な王子が申しました。人々は王子から金を貰つて、二人を赦すことにしました。それが決ると、三人は自分の家の方に立出しました。

さてその日は、大層熱い日でありましたが、三人が冷い森を通つて行くと、

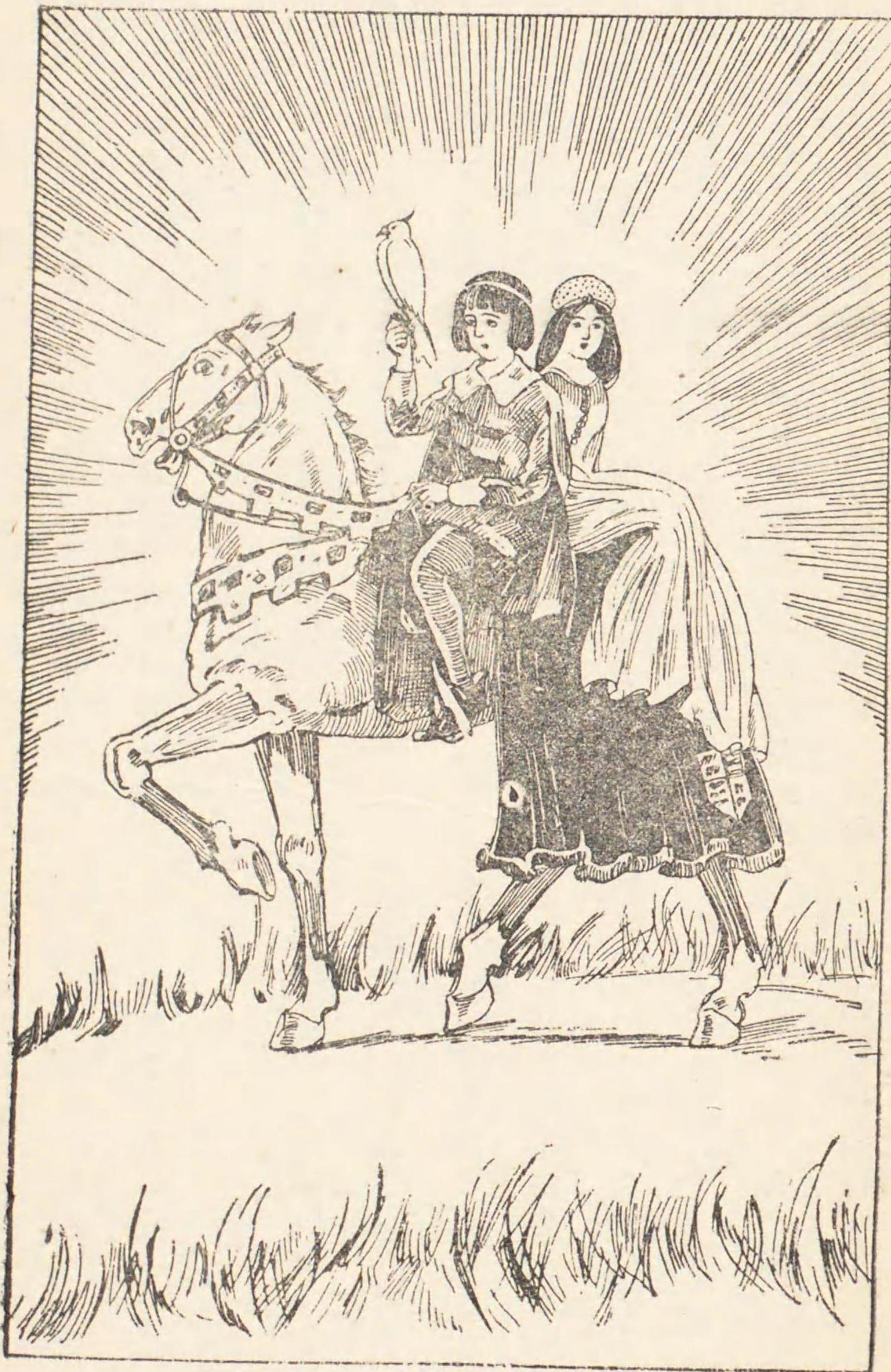


二人の性質の悪い兄が、

「熱くて、この上旅が出来ない。暫時、この井戸で休まうぢやないか。」といひました。

末の王子は、何の氣なしに、そして、狐にいはれたことも忘れてしまつて、馬から降りると、井戸の端に坐りました。と二人の兄は、しきなり弟の王子を突き飛ばしました。王子はそのまゝ、眞倒様に井戸の中に落ちました。二人の兄は、黄金の馬と、黄金の鳥と、美しい王女を連れて出發しました。二人がお父さんの御殿に参りますと、人民達も集つて来て、二人の王子が無事に歸つて来たのを歡び合ひました。

「私共は黄金の鳥を手に入れて歸つたばかりでなく、黄金の馬と美しい王女を連れて歸りました。」と二人はお父さんの王にいひました。





王様は大層お喜びになりました。人民達も喜んで萬歳を叫びました。
併し黄金の馬は、物を食べず、黄金の鳥は一聲も鳴かず、王女は一日中坐つて泣いてゐました。

さて末の王子は、井戸に落ちましたけれども、井戸の中には水がなく、柔かい苔が生えてゐたので、生命は助つたのでありました。
王子は少しの怪我もありませんでしたが、井戸が深くて上ることができませんでした。どうなることかと心配しながら、井戸の底に坐つてゐました。と、不意に上から何かと下りて來たと思ふと、温かな柔かい鼻が手に觸りました。これは例の狐でありました。

『また、ひどい目にお逢ひになりましたネー。あなたは何時になつたら、私のいふことをお聴きになるのです？ 併し、このまゝ捨てゝは置けませんか』

ら、もう一度助けて上げます。さア私の尾をつかまへなさい。』
 と狐がいひましたので、王子はその尾をしつかりと掴みました。そこで狐
 は、王子を自分の尾にぶら下げて、井戸の上に這ひ上りました。
 『あなたは氣をつけないといけません。あなたの兄さん達は、あなたが若し
 や歸つて来るのではないかと、用心してゐます。』と狐がいひました。
 王子はどういふ風に姿を變へてよいかと考へながら、歩いて行きますと、
 老人の乞食に出逢ひました。王子はその乞食の檻樓と、自分の衣物とを取り
 代へて、父の御殿へ行きました。
 王子が御殿の庭に入り込むや否や、黄金の馬は食べはじめ、黄金の鳥は歌
 ひ出し、王女は泣くのを止めて、喜んで踊り出しました。
 『これは、どうした譯だ？』と歳とつた王様が王女にお訊ねになりましたの

で、王女は今までの話をすつかりして、
 『あの王子様がお歸りになつたに違ひありません。私の涙が留つて、自然に
 笑へて参りましたから。』といひました。
 そこで王様は、御殿にゐる者を皆な自分の前に立たせました。末の王子が
 歳とつた乞食の姿で現はれますと、王女はすぐに、それと氣がついて、駈け
 寄つて、王子の頸にすがりつきました。
 王様は二人の悪い兄の王子を、怒つて御殿から追ひ出しました。末の王子
 は大層歓迎されて、間もなく王女と結婚の式を挙げました。
 末の王子は、かうして大層幸福な身になりましたけれども、忠義な狐のこ
 とが忘れられませんでした。王子は度々森の中へ行つて、狐を探しました。
 たうとう、或日、狐がぼろ／＼の蘆を着て尾を垂れて、悲しさうに洞穴に坐

つてゐるのを見つけてきました。

「あゝ、あなたは幸福になりましたが、私は生きてゐるのが嫌になりました。どうか私の願ひをお聞き下さい。私を射ち殺して、首と前足を切り落して下さい。」

狐が悲しさうな様子で、かう申しますので、王子も願ひの通りにしてやる方がよいのかも知れないと思つて、狐の首と前足を切り落しました。と、驚いたことが起りました。狐の皮の中から、立派な若い王子が一人現はれたのです！

この王子は、末の王子の妻となつた美しい王女の兄だつたのです！ この王子は魔術にかゝつて、長い間、狐になつてゐたのですが、たうとう、その魔術からとかれて、元の王子になつたのです。

一同はこの上もなく幸福でありました。王女は日が経つに従つてだん／＼美しくなつて行きました。黄金の馬は風よりも早く走りました。黄金の鳥は黄金の林檎の木に止つて、美しい聲で鳴きました。吹く微風も、この聲に耳を傾け、日の光もその聲に合わせて踊りました。

勤勉な小鬼

大昔、仙女が月の下で踊り、小鬼が山の中で仕事をする時のことでありました。或小さな村に、貧しい靴屋の夫婦が住んでおりました。靴屋は正直でもあり、仕事好きでもありませんでしたが、一日くと貧乏になつて行つて、たうとう、一足の靴の皮を買ふだけのお金しかなくなりました。そして、この一足の靴を造れば後はどうして暮して行くか、あてがありませんでした。靴屋は皮を買ふと、それを切つて、次の朝早く起きて、縫ふつもりで、お祈

をしてから、寢床に入りました。

次の日、朝早く起きて、靴屋は窓の戸を開けました。と、不思議な事が起つてゐたのです。前の晩、切つて置いた皮が、立派な靴になつてゐたのです。靴屋は夢ではないかと思つて眼をこすつて見直しました。が、矢張り靴が窓から入つて来る朝の光の中に、ちやんと置いてあるのです。靴屋は手に取り上げてその靴を見ますと、針の縫目も、釘の打方も申分なく出来てゐて、今までこんなに旨く出来た靴を見たことがないと思ひました。靴屋はその靴を店の窓の中に置きましたが、間もなく客が来て、靴屋が思つてゐたよりも、二倍の代金を拂つて、その靴を買つて行きました。

靴屋は外へ行つて、二足ぶりの皮を買つて来ると、それを切つて、次の朝早く起きて仕事をするつもりで床に着きました。併し、次の朝早く靴屋が起

きて、仕事をする腰掛の所へ行くと、前の朝のやうに、靴が二足、ちやんと出来上つてゐました。そして、この靴も直ぐに賣れました。といふのは、この靴位履心地のよい靴が今までになかつたからです。靴屋は二足の靴を賣つたお金で、今度は四足分の皮を買ひましたが、次の日の朝になると、また四足の靴がひとりで出来上つてゐました。かうして、靴屋はだん／＼店が繁昌して、お金持になりました。そして、不思議な靴の話が遠い所までも擴がりました。で、この靴屋の毎日の仕事といつたら、たゞ晝の内に皮を切つて置けばよかつたのです。朝になると、その皮が立派な靴になつて、十二足もぞろりと並んでゐるといふ譯でしたから。

さて、クリスマスも近く、地には雪が降り積る時でありました。或夜、靴屋はその妻に向つて、

「私達は起きてゐて、誰が靴を造つてくれるのか、見ることにしよう。」といひますと、妻も、

「ほんとに、さうしませう。そしてお禮をいひませう。」と答へました。

そこで夫婦は、蠟燭をつけて、仕事場の隅の大きな箱の後に隠れました。時計が十二時を打つと、戸が廣く開いて、二匹の小鬼が踊りながら入つて来ました。鬼といつてもこの小鬼は、普通の小鬼のやうに醜くはなく、その踊つてゐるのを見ると、盥の中で嬰兒が足を蹴り廻はしてゐるやうで、可愛くて、可笑しくありません。小鬼は寒いのに、衣物を着てゐませんでしたから、身體を温めるために、足を絶えず動かして踊らねばなりません。暫時たつと、小鬼は靴屋の腰掛に飛び上つて、その小さい足で、胡坐をかいて、針に糸を通すと、忙がしさうに縫ひはじめました。その小さな手は手際よく

そして、飛ぶやうに動くので、見てゐる靴屋夫婦が、眩暈する程でありました。そして小鬼は、夜の明けぬ間に、すっかり靴を縫ひ上げて、ちやんと並べてから、戸の外へ出て行きました。

「呆れたネ！ あの小鬼達は困つてゐる人間を助けるよい小鬼なのだ。どうかして、あの小鬼達にお禮をしたいものだ。」と靴屋がいひました。すると、妻も、

「ではかうしたら、どうですか。あの小鬼達はこの寒いのに、衣物を着てゐませんから、私は小さな温い衣物と、毛糸の靴下と、小さな靴を拵へて上げませう。」といひました。

親切なこの靴屋の妻は、赤い反物と、柔かい毛糸を買つて来て、小鬼の體に合ふやうな衣物と靴下を拵へました。亭主も、今までに見た事もないやう

な、小さな綺麗な靴を造りました。

クリスマスの夜になると靴屋夫婦は、今度は皮を用意しないで、拵へた品物を腰掛の上に並べて、様子を見るために箱の後に身を隠しました。時計が十二時を打つと、二匹の小鬼は前のやうに、踊りながら入つて来て、腰掛の上へ飛び上りましたが、赤い衣物やその外の物が並んでゐるのを見ると、喜んで高聲で叫んで、急いで衣物を着はじめました。そして、衣物を着てしまつて靴下を履き、小さな靴に小さな足を入れると、喜んで今一度高い聲で叫んで、椅子やテーブルの周圍を廻りながら踊りました。

利口さうな小さな紳士になつた
上等の衣物を着た紳士になつた
二度と靴屋にならないぞ



小鬼は靴を踏み鳴して、帽子を横に被りながら、月が光つてゐる戸の外へ踊りながら出て行きました。

小鬼はもう、二度と靴を縫ひにやつて来ませんでした。靴屋はもう、お金持になりましたから、小鬼に助けて貰ふ必要がなかつたのです。併し毎年、クリスマスの夜、小鬼は山から下りて来て、靴屋の店から、自分達のために造られた、新しい小さな衣物や、靴や、靴下を貰つて歸るのであります。



ヘンゼルとグレテル

すつと遠い暗い森の近くに、樵夫夫婦が二人の子供と一しよに住んでゐました。樵夫はひどく貧乏で、二人の子供のヘンゼルとグレテルとは、時々食べるパンもなくて苦しみました。二人の子供のお母さんは、二人がまだ、ほんの子供の時に亡くなつて、新しく入つて来たお母さんは、二人の子供を可愛がりませんでしたから、可哀想に、ヘンゼルとグレテルは、つらい日を送つてゐました。

冬が来ると、樵夫の家がいよ／＼貧しくなりました。或夜、樵夫が妻に向つて、

「どうしたらよいかネ？ パンがもう一斤しかなくなつた。これぢや、餓死する外に仕方がない。」といひました。

「子供をどうかしなくてはいけませんよ。明日、子供を森へ連れて行つてお捨てなさい。子供は道が分りませんから、家へは歸つて來られませんか。」と妻が申しました。

「イヤ、イヤ、そんな事は出来ない。さうしたら、飢えて死んでしまふぢやないか。」

「併し、四人一しよにゐても、飢ゑて死ぬんぢやありませんか。それよりも捨てた方がよいでせう。」

妻はかういつて、夫をいひ込めて、たうとう自分のいふ事を承知させました。

さて、夜は更けてゐましたが、お腹が減いたために、眠れなくて起きてゐたヘンゼルとグレテルは、親達が話したこの話を、聞くともなく聞いたのでした。

「ア、私達は暗い森の中で、おそろしい獣物に食べられてしまふのだ。」と妹のグレテルはいつて、嘔り泣きをはじめました。しかし、兄のヘンゼルは、

「泣くのをお止め、私があるから大丈夫だよ。」といつて、寢床から這ひ出して、上衣を着ました。

ヘンゼルはこつそり戸を開けて外へ出ました。外は月の光が美しく輝いて

道傍の白い石が新しい銀貨のやうに光つてゐました。ヘンゼルは俯いて石を拾つて、出来るだけ澤山ポケットに入れました。そして、こつそり歸つて、また寢床に這ひ込みました。

次の朝早く、繼母は二人の子供を起して、急いで衣物を着るやうにいひつけて、

「今日はお父さんが森へ木を切りに行くのだから、お前達も一しよに行くのだよ。」と申しました。

繼母は二人の子供に一切づゝのパンを與へて、親子四人で出發しました。

ヘンゼルはポケットに一杯石を入れてゐましたから、グレテルは二人分のパンを前掛に入れました。

行く途中、ヘンゼルは時々立ち止つて、後を見るので、父の樵夫が、

「何故、お前は時々後を向くのだ。氣をつけないと、躓いて轉ぶよ。」といひました。するとヘンゼルが、

「私は家の屋根の上に坐つてゐる猫を見てゐたのです。猫は左様ならしてゐるやうです。」といひました。すると繼母が、

「馬鹿！ 猫なんてゐやしないよ。屋根の上にはお陽様が當つてゐるだけぢやないか。」といひました。

併しヘンゼルが、後を向いたのは猫を見たのでなく、後を向くたびに、日印のために、白い石を道の上に落したのでありました。

一同は森を奥へくと入つて行きましたが、道はますます峻しくなりました。樵夫は立ち止つて、枯枝を集めて来て、それを積み上げるやうに、二人の子供にいひつけました。

「お前達は、私が木を切つて歸つて来るまで、此所で火を焚いて休んでお出で。」

かう父はいつて、繼母をつれて、行つてしまひました。

ヘンゼルとグレテルとは火の傍に坐つて、楽しさうにパンを食べました。

二人は、父が近くの森の中で木を切つてゐるとばかり思つてゐたのです。しかし、木を切る音と思つたのは、風に吹かれる枯枝の音でありました。間もなく、二人は、長い道を歩いて疲れてゐましたから、枯枝の上になぐかまつて、ぐつすり寝込んでしまひました。

二人が眼を覺すと、もう四邊は暗くなつてゐて、火も消えてゐました。そして耳に聞える物音は、頭の上の方で鳴く鳥の聲でありました。

「兄さん、どうしませう？ こゝは深い森の中ですから、私たちはもう家に

歸ることが出来ません。」とグレテルは泣き出しながらいひました。

「グレテル、月が出るまでお待ち。月が出ると連れて歸つてあげるから。」といつて、ヘンゼルは妹をなだめました。

銀色の月が現はれると、暗い森が晝のやうに輝きました。二人の子供は手に手を取つて出かけました。先きに落して置いた小石が、小さな銀のランプのやうに光つて、道案内してくれましたから、やがて二人は自分の家に歸り着きました。

「この馬鹿！ お前達は、もう家へ歸つて来ないと思つた。今頃まで森にぐづぐづしてゐた罰に鞭で打つから。」

樵夫の妻は、戸を開けて二人の子供が入つて来た時、かういつたのでした。併し、父の樵夫は喜んで二人を腕に抱いて、幾度もくく接吻しました。樵夫

は、もう二度と我が子の顔を見られないかと思つて、悲しんでゐたのでした。それから間もなく、樵夫の家にはパンがたつた一切しなくなりました。そこで、また妻が、夫の樵夫に向つて、

『いよく貧乏のどん底に落ちました。四人一しよにゐて、飢ゑて死にますか。それとも、子供を今一度森に捨てますか。』といひました。

樵夫は妻の言葉を聞いて、大層悲しく思ひましたが、始めに承知した事を二度目に承知しない譯に行きませんでした。

二人の子供は寢床の中で顛へながち、親達の話聞いてゐました。妹のグレテルはひどく驚いてしまひました。併し兄のヘンゼルは妹を慰めて、また小石を拾ひに外に出ましたが、今度は月が雲に隠れてゐましたから、小石を拾ふことが出来ませんでした。で、仕方なく寢床に歸つて、外の方法を考へ

ました。

『お起き！ この怠け者。お前は今日は森へ行くのだよ。こゝに晝飯のパンがある。』

次の朝、繼母はかう叫んで、小さなパンを二斤、子供に與へました。グレテルはパンをポケットに入れましたが、ヘンゼルはパンを小さく砕いて、道を行きまながら先きに小石を落したやうに、パン屑を落しました。

『何故、お前は後を向いたりなんかするんだ。ぐづくしないで早くお歩き。』と、樵夫の妻がいひますと、

『私は、屋根に止つてゐる私の白鳩に、左様ならをいつてゐるのです。』とヘンゼルが申しました。

『馬鹿！ 鳩なんてゐやしないよ。濡れた屋根を照してゐるのは、お日様だ

よ。』と繼母がつ、けんどんに申しました。

併し繼母は、ヘンゼルが振り向く度に、パン屑を落したのに氣がつかかなかつたのです。

今度は一同は、前の時よりも、ずつと遠く森の奥へ入つて行きました。子供が大分疲れた頃に、樵夫は子供にいひつけて柴を集めさせ、それに火をつけて燃やしました。

『私達が戻つて来るまで、此所で待つてゐな。』

父はかういつて、妻と一しよに、行つてしまひました。グレテルはパンを兄に分けて、二人で晝飯を濟ませましたが、その間に疲勞が出て、ぐつすりと眠り込んでしまひました。

二人が眼を覺した時は、もう夜になつてゐました。妹のグレテルは今にも

獸物が出て来て、食べてしまはれるのではないかと泣き出しました。併しヘンゼルは、少しも恐れず、

『グレテル、大丈夫だよ。直ぐ家に歸れるよ。私は来る道々、目印にパン屑を落して置いたのだから。』といひました。

併し、どうでせう！ 道に落して来たパン屑を鳥が皆な食べてしまつたので、家へ歸る道が分らなかつたのです。それでも二人は、その夜も次の日も前へくと歩いて行きました。森はますます深くなるばかりでありました。二人は森の木の實を食べてやつと歩きましたが、三日目の朝になると、もうお腹が減つて、死ぬばかりになりました。

『兄さん、お腹が減いたから、仙女の葺でも食べませうか。』とグレテルがいひました。

しかし、ヘンゼルは、しつかりと妹の手を握つて、後に引きよりました。二人は、不意に自分達の頭の上の木の枝に、美しい白い鳥が止つてゐるのに気がつきました。鳥は何ともいへない、よい聲で鳴きました。やがて大きな白い羽を擴げて飛び出したので、二人はその後に隨つて駆けだしました。鳥も子供が隨つて来るのを知つてゐるやうに、そろ／＼と輪を廻がきながら飛びました。その内に森の中の小さな小屋の前に来ますと、其所で止つてしまひました。

子供達が近づいて見ますと、その小屋といふのは今までに見た事もない、奇妙な小屋で、すつかりパンで出来てゐて、周圍にはお菓子が飾られてゐます。窓は透つた氷砂糖で出来てゐて、階段は桃の實で出来てゐました。「これは大變な御馳走だ！」といつて、ヘンゼルは爪先を立て、垂れ下つて

ゐるパンの屋根をむしり取らうとしました。

「グレテル、氷砂糖か、桃をお取りよ。」といひますと、グレテルは一方の手でお菓子をとり、一方の手で氷砂糖を一片取つて、面白さうに桃の階段に腰を下しました。二人はかうして大急ぎで食べてゐると、小屋の中から優しい聲が聞えて來ました。

ポリ／＼ ポリ／＼

パンの家をかぢるのは

鼠かい？

併し、子供達はいひました。



鼠と思ふのは風ですよ

パンのお家は誰も食べません

小供達はかうして食べ続けてゐますと、小屋の戸が開いて、大層歳とつたお婆さんが、ひょつこり現れました。

ヘンゼルは屹驚して、思はずパンの食べかけを下に取り落しました。グレルも驚いて、氷砂糖を口に入れたまゝ、噛むのを止めました。

『可愛い子供さん。心配しなくともいゝよ。私の家はいくら食べても構はない。だが、中へお入り。御馳走をしてあげるよ。』

お婆さんはかういつて、二人の子供を小屋の中に入れて、お饅頭や、林檎タートや、クリームを食べさせました。それから、小さな白い布の寢床に寢





させました。二人は急に天國へ来たやうに思ひました。

併しこのお婆さんは、外部は親切で優しさうに見えましたが、實は魔女で、肥えた子供を殺して食べてしまふ恐ろしいお婆さんでした。お婆さんは赤眼で、近眼でしたが鼻は狐のやうに、物をかぎ分けることが出来るので、ヘンゼルとグレテルが森に迷ひ込んで来た事を早くから知つてゐました。お婆さんは子供達を捕へるつもりで、パンの家を拵へて待つてゐるのです。

次の朝早く、魔女は眠つてゐる二人の子供のところへ来ました。そして子供の旨さうな柔い肉を見て、皺だらけの手を擦つて喜びました。魔女は、今少し肥つてから食べようと考へて、骨立つた手で、まだ眠つてゐるヘンゼルを掴んで、小さな鐵の籠に入れました。そして、びっちりと、格子戸を閉めてしまひました。そして今度は、グレテルの肩を掴んでやり起して、

「起きないか、この寢坊！ お前は火を起して、水を汲んで、朝飯の用意をするんだ。私はお前の兄を籠に入れた。もつと肥つてから、料理をして食べるのだ。」といひました。

可哀想に、小さなグレテルは、仕方なく魔女のいひつけに従ひました。

ヘンゼルは大變旨しい物を食べさせられました。グレテルはたゞ貝と蟹の足だけしか貰へませんでした。魔女は毎日、鐵の籠の前に立つて、ヘンゼルに向つて、

「子供、どれ指をお出し。肥つたか見てやらう。」といひました。

併しヘンゼルは、魔女が赤目で近眼であることを知つてゐましたから、その度に、指の代りに骨を出して見せました。魔女は、ヘンゼルがいくら経つても肥らないのに業を煮やしました。

たうとう、魔女は我慢が出来なくなつて、グレテルに向つて、

「お前の仕事はふえたから、明日は早く起るのだよ。私は明日、お前の兄を料理して食べてしまふのだから、お前は籠に火を起し。」といひました。

グレテルは胸がはり裂けるやうに思つて、

「ア、森の中で、お腹が減いて、兄さんと一しよに死ねばよかつた！ 獣物に食べられてしまつた方がよかつた！」と啜り泣きました。

すると魔女は、嬉しそうに、赤い眼をしよぼくさせながら、

「涙で面を洗つたつて、役に立ちはしないよ。泣くのはお止し、涙で火が消えはしないからね。」といひました。

次の日、グレテルはいやく／＼起き上つて、大きな鍋に水を入れて、火を燃して釜を熱くしました。用意が出来上ると、魔女はグレテルに向つて、

「粉をこねたからパンをお焼き、お前は釜に這ひ込んで、熱くなつてゐるか見てお出で。」といひました。魔女は、グレテルが釜に入ると、蓋を締めてしまつて、パンの代りに焼いて食べるつもりだつたのです。併しグレテルは、魔女の悪計を見抜きましたから、
 「釜の戸が大層小さいのですネ。どうして中へ入つたらよいのでせう？」といひました。

「馬鹿！ 口がそんなに大きいじゃないか。かういふ風に頭から入つたらよいのだよ。」

魔女はかういつて、下にしゃがんで、頭を釜の中へ入れました。

と不意にグレテルは、後から満身の力をこめて、魔女を突きました。魔女は倒様に釜の中に落ち込みました。グレテルは外から、戸をしつかりと締め

てしまひました。

グレテルはヘンゼルの入れられた籠の鍵を見つけると、兄さんの所へ駆けて来て、

「魔女は釜の中で死にましたよ。」といつて、籠を開きました。そして二人は抱き合つて踊りました。

それから二人は、魔女の持つてゐた寶の箱を開いて、ヘンゼルはポケットに、グレテルは前掛に、出来るだけ澤山の眞珠や、ダイヤモンドや、紅石や、その他の寶石を入れました。

二人は手に手を取つて、魔女の小屋を後にして、自分達の家に向つて出立しました。と、間もなく、一ツの大きな湖水のところへ出ました。湖水の幅は廣くて、とても船がなければ渡ることが出来ませんでした。

『どうすれば、宜いか知ら？ 橋もなければ、船もないし。』とヘンゼルがいますと、グレテルは、

『ご覽。白い鴨が泳いでゐますよ。あの鴨が私達を助けてくれますよ。』といつて、歌をうたひ出しました。

小さな鴨、小さな鴨、助けておくれ

道に迷つた二人の子供を助けておくれ

優しい聲でなく鳥よ

お前の白い背中の上に

私等二人を乗せていつておくれ

すると鴨が、此所に泳いで来て、湖水を渡して上げませうといふやうに、

背中を向けました。ヘンゼルが先づ鴨の背中に上つて、それから自分の膝の上に、グレテルを乗せようとなりました。併しグレテルは、二人乗れば重過ぎると思つたので、鴨が兄さんに向うの岸に渡して、此方に戻つて来るまで待つてゐました。

かうして、鴨に渡して貰つた二人は、向うの岸に着きました。そこは二人とも、よく知つてゐる森の端でした。兄と妹は、ひどく喜びました。二人は急いで駆け出しました。次の曲角まで来ると、自分の小さな家の前で、お父さんが立つてゐるのが見えました。

二人の子供が、自分の腕に飛び込んで来たので、お父さんの樵夫は、夢中で喜びました。子供を森に捨てた後、樵夫は妻を失くしたので、たつた一人

小屋の中で、悲しい日を送つてゐたのでした。樵夫は二人の子供を腕に抱えて、嬉し泣きに泣きました。子供達は、魔女の手からどうして逃げて来たかその話を詳しく話しました。

『持つて来たお土産を見て下さい。』
妹のグレテルはかういつて、前掛を擴げて、キラ／＼光る寶石を出しました。

『これをご覧下さい!』

ヘンゼルもポケットから、寶石をつかみ出して、床の上に置きました。かうしてお金持になつた樵夫の家の親子は、もう二度とお腹が減いて苦しむといふやうな事がなくなりました。併しダイヤモンドも、紅玉も、價値の高いものでしたが、ヘンゼルとグレテルは、月夜の晩に、道傍で赤く光つて

ある白い小石の方が、よつほど美しいと思つてゐました。

(をばり)

昭和二年九月十日印刷
昭和二年九月十八日發行

(版權所有)

(金の星家庭文庫)

(3)

◇定價金貳圓◇

(送料十二錢)

著者

金の星社編輯部

右代表者 齊藤次郎

東京府澁野川町中風一二七番地

發行者

齋藤保

東京府西巢鴨町向原二九九七番地

印刷者

宮尾綱三郎

發行所

東京市本郷區
動坂町三五九

金の星社

振替東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

世界少年少女著名大系

- (1) ロビンソン漂流記
- (2) ナポレオン物語
- (3) ドン・キホーテ
- (4) ギリシヤ神話 イリアツド物語
- (5) ガリバー旅行記
- (6) ロビン・フッド物語
- (7) アラビヤン・ナイト
- (8) ギリシヤ神話 オデッセー物語
- (9) シエークスピヤ物語
- (10) グリム童話
- (11) 繪入 イソップ物語
- (12) 日本神話 古事記物語
- (13) ゴモ 新約物語
- (14) キリスト傳 西遊記
- (15) ローマ英雄物語
- (16) 聖書物語

金の星社の『世界少年少女著名大系』は、少年少女の爲に、世界的名著を、最もわかりやすく紹介したもので、しかも、有名な畫家の装幀になり、クローズ製本箱入の立派な本であります。ありふれたる名著の紹介とは異り、金の星社が、全力をそ、いで完成しつゝ、ある、一大叢書でありますから、今や熱烈なる歡迎を受け、各圖書館は勿論のこと、少年少女のある家庭には、是非なくてはならぬ備品とされて居ります。定價各冊金九十錢◇送料十二錢

世界少年少女著名大系

- (17) 奴隸トム物語
- (18) ギリシヤ英雄物語
- (19) アンデルセン童話
- (20) 小公子
- (21) 母を尋ねて三千里
- (22) 不思議國めぐり
- (23) 青い鳥
- (24) 爲朝一代記
- (25) ハムレット
- (26) 新ロビンソン漂流記
- (27) ポムペイ最後の日
- (28) 少年鼓手
- (29) ロミオとジュリエット
- (30) ジャンバルヂヤン(あゝ無情)
- (31) 竹取物語
- (32) みなし兒
- (33) 平家物語
- (34) フランダースの少年
- (35) ジーグフリード王子物語
- (36) トルストイ童話集

世界少年少女偉人傳大系

◇ 一冊金九十錢 ◇ 送料二十錢 ◇

1 ジヤンヌ・ダルク

オルレアンの乙女ジヤンヌ・ダルクが健氣にも、か弱い身を以つて母國を滅亡から救ふ教訓と興味ある物語です。

2 ローマ英雄 シーザー

世界的英雄ジュリアス・シーザーの幼年時代からローマ元老院で刺殺されるまでの大活躍を現した歴史物語です。

3 ネルソン

トラファルガルの海戦に名譽の死を遂げたネルソンが愛國の赤心と責任を重んずる觀念は實に偉大な教訓を讀者に與へます

4 リンコルン

賢しいリンコルンが如何にして大統領の榮位を勝ち得たか？最も優れた立志傳としてこのリンコルン傳をお勧め致します

5 太閤秀吉

日本の英雄として世界に誇れる太閤秀吉が大英雄なる迄に如何に苦勞したかを史實によつて興味深く紹介したものです

6 ナイチンゲール

ナイチンゲールの少女時代から赤十字の仕事が始めたまでの傳記です。本書により尊ぶべき彼女の一生を知られよ。

7 ワシントン

アメリカ獨立の大恩人ワシントンの少年時代から一生を通じて正直と勤勉と勇氣を以て大仕事を完成した偉人の傳記です

8 大楠公

誠忠無二の忠臣楠正成の一生を著者獨得的研究的見方で書いた物で、これ程正成の面目を現はした本はありません。

9 ピーター大帝

少年時代から死に至るまで働き続けロシアをして世界の強國たらしめた一代の英傑ピーター大帝の一生を知られよ。

10 コロンブス

コロンブスが幾多の困難と戦ひ遂にアメリカ大陸を発見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語です。

世界少年少女偉人傳大系

◇ 一冊金九十錢 ◇ 送料二十錢 ◇

日本歴史實傳物語叢書

▽定價金壹圓
▽送料十二錢

(1) 源 義 經

義經ほど皆さんから好かれてゐる武將はありま
すまい。この本は、義經の生ひ立ちからはじま
つて、例の有名な壇の浦で義經がはなばなし
合戦をするあたりまでを、本當の史實をしらべ
て書いたものですから、實に面白い本です。

(2) 曾 我 兄 弟

親の仇を討つた曾我兄弟のお話です。五郎十郎
の悲しい少年時代から艱難辛苦して遂に親の仇
を討つまでの涙のこぼれるやうなお話です。あ
りふれた講談本と違ひ、三島先生が史實を研究
の結果、出来上つた苦心の名著です。

(3) 赤穂四十七士

赤穂四十七士のお話は誰でも知つてゐるでせう
が、この本を讀んだ人でなければ四十七士のこ
とを本當に知つてゐるとはいへません。誰に
もおすゝめしたいと思ふほど面白く、良い本で
す。幾度か繰返し讀ますにはゐられぬでせう。

(4) 小 楠 公

楠正行のお話は、有名であつても本になつてゐ
るの割合に少いのです。正成の死後、南朝の
ために正行が忠義をつくし、はなばなしの最期
を遂げるまでの繪巻物のやうな美しい物語です
同じ著者の『大楠公』と共に御一讀下さい。

少年文學
名著選集

各篇とも四六判三百頁以上四百頁の一つぶ
より世界の傑作です。内容といひ装幀の
美といひ、定價の安い事といひ金の星社獨
特の出版でありますから御一讀下さい。

▽定價金壹圓貳拾錢
▽送料 十錢

(1) 十五少年漂流記

佛國ジュウルのカエルヌ原著 霜田史光譯
十五人の少年が絶海の孤島に漂流し、そこ
であらゆる冒険を行ひ、苦心慘膽の結果、
漸くにして故郷へ歸つて來るまでの物語り
です。こんな面白いお話は、世界の少年文
學を通じて實にまれです。

(2) 家なき兒

佛國マローロ原作 三宅房子譯
本書は世界の名作として各國語に譯され
てゐます。名家に生れたが、不慮に運命に
もたせられ孤兒が、遂に旅藝人に賣られ
ちた一大雄篇であります。

(3) 黒馬物語

英國アンナ・シーウエル原作 永橋卓介譯
大世界各國の少年少女に熱狂的歡迎を受けた
大傑作です。一匹の黒馬が自分のお話を
でつた嬉しき物語や、不朽の傑作でありま
す。かわりませぬ、不朽の傑作であります。

(4) 父 戀 し

沖野岩三郎先生著 沖野先生の傑作とし
て名高い作です。物語は紀州の漁村に起つ
た哀話で、父は漁師、母は行方不明な
り、残された満洲の空でめぐり逢ふ
一尋ね歩いては、わが國少年文學の大傑作

世界名作童話大系

◇ 錢六料送 ◇ 錢拾六金冊一 ◇

1 魔法の薔薇	2 ほら博士	3 盗まれた王女	4 親指トム	5 アラビヤン航海の巻
やさしい王子が、女神から魔法のバラをさづけられ、そのバラのおかげであらゆる困難から救はれる、面白いお話です。	ほら博士といふほど大ぼら吹き、の男爵のお話です。實になんともかんと、お腹をかへて笑はずにはあられないお話です。	ベルシヤの國に傳へられてゐる不思議なお話で、リンダガルといふ王女様が魔法使にさらはれそれを王子が助けに行くのです。西洋の一寸法師のお話です。親指の大きさがなにか親指トムがありとあらゆる冒険をやるので、すから、實に面白いお話です。	船乗りのシンドバッドといふ男の七度の航海のお話です。幾度となく魔の島へながされてそこで出あつた不思議なお話です。	

世界名作童話大系

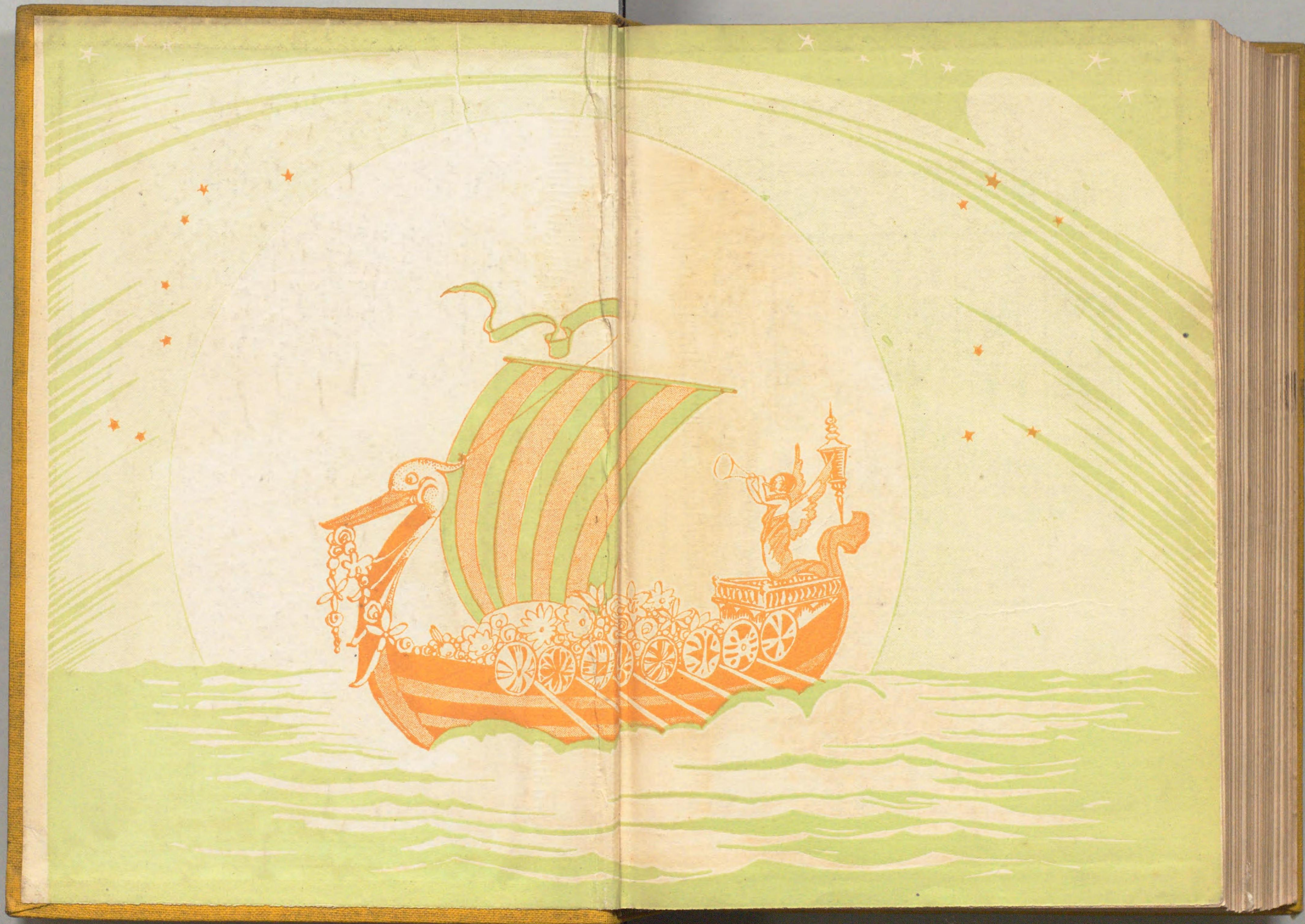
◇ 錢十料送 ◇ 錢十六金冊一 ◇

6 利口な驢馬	7 大勇士	8 ヒーターパン	9 魔法の小人	10 人買物語
驢馬が自分の一生をお話にしたのです。百姓家の驢馬がしまひに見世物にまで出るので、すから實にスバラシイお話です。	ピオウルフ王は世界に二人となつた勇士です。人民を救ふ爲めに人喰鬼と戦つたり悪龍と戦つたり、あらゆる困難をします。	有名なヒーターパンのお話です。日本にも活動寫眞になつて來たりして大層な評判でした。本になつたのはこれが最初です。	やさしい少年は悪い小人の爲めに命までとられやうとしました。が遂に王女様の寶を發見して王子と王女とを危難から救ひます。	古い傳説にある人買の物語りです。安壽姫と厨子王が落ちぶれて人買の手に渡り、さまざまの困難に遇ふ哀しいお話です。

沖野先生の童話讀本

◇ 錢十金料送・圓壹金冊各價定・本美入箱判六四 ◇

<p>沖野先生の童話讀本は、ありふれた外國のお話を集めたやうな種類の童話讀本とは違ひます。宗教的文學者として深い経験を持つてゐる沖野先生は、また幼稚園に、小学校に、日曜學校に、自ら指導者として深い経験を與へればならぬ本である。是非御一讀を願ひます。</p>	<p>1 赤い猫 (向級初)</p> <p>有名な「熊と猪山さち」「川さち」「三つの寝床」などのお話や、これ等十五のお話は、恐らく幾度讀み返してもあきないでせう。初級向きとして大きい活字で組んであります。</p>	<p>2 金の釣瓶 (向級初)</p> <p>この巻には、沖野先生が傑作中の傑作として、人の「大将」も得意にして各地で話される「十まるべ」の「二つ」の譲りなご、これこそ兒童に讀ませたいと思ふものばかり集められてゐます。</p>	<p>3 笛吹川 (向級上)</p> <p>第三巻「笛吹川」には、本當にあつたあはれな少年のお話や、面白くお話しやおかしな話など、いろいろと面白く、しかも沖野先生が持つてゐる教訓を強ひず、自ら供自身に教へられて行く深い暗示があります。</p>	<p>4 海を越えて (向級上)</p> <p>この巻には、有名な材料を取つたものばかり集めてあります。事から材料を取つたものばかり集めてあります。創作童話として現代に傑作として評判の高いものです。</p>	<p>5 孝行息子 (向級上)</p> <p>この集には、「猫のぬい村」「水汲み」「愚助大和尚」「ルオンと涼也」「油うり」「弟子入り」「李如松の話」「不意の敵」「お日様問答」「眠めつぐらの鬼瓦」「孝行息子」その他二篇の寶玉のやうな十三篇が集つてゐます。</p>
--	--	---	---	---	--



児乙部27-K-13



1200600483515

